
1960、70年代における 自衛隊退職者団体隊友会の動向

— 月刊紙『隊友』から —

津田 壮章

京都大学大学院人間・環境学研究科

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチアソシエイト

はじめに

自衛隊では、精強な軍事力の維持を目的として、一般の会社組織よりも定年が早く設定されている。1960年、70年代においては50歳前後で定年、または20代、30代前半で任期満了を迎える。その後、多くの退職者は再就職することとなる。自衛隊による地域社会や退職者に対する政策は、自衛隊発足後、比較的初期の頃から防衛庁・自衛隊内において議論されてきている。1957年に閣議決定された「国防の基本方針」では、4つある方針の2番目に「民生を安定し、愛国心を高揚し、国家の安全を保障するために必要な基盤を確立する」¹⁾と規定し、民生協力や愛国心の高揚を安全保障の基盤として位置付けた。本稿で対象とする隊友会²⁾は、防衛庁・自衛隊から金銭面・人事面での支援を受け、1959年7月10日に、既に各地にできていた退職者団体を吸収する形で結成される。「隊友会規約」第3条において「自衛隊退職者の親睦と相互扶助を図るとともにその福祉の増進に努め、併せて国民と自衛隊のかけ橋として相互の理解を深めることに貢献し、もってわが国の平和と発展に寄与すること」³⁾を会の目的とする隊友会が防衛庁・自衛隊の支援を得て誕生したことは、この時期から退職者を通じた防衛基盤の育成が位置付けられていたといえよう。

1960年代の陸上自衛隊幹部学校においても、地域に対する政策や退職者に関する議論が見られる。陸将(当時)の新宮陽太は、「私は、民生協力を強

力に打ち出し、真に国民と一体となり、小にしては県民、村民の生活の必需品的なものにまでならなければ、全国民的支持はえられないし、また、間接侵略に対しても、万一の直接侵略に対しても、対処能力は出て来ないのではないかと思う」⁴⁾として、主には間接侵略対策としての民生協力を訴えていた。第12師団長で陸将(当時)の藤原岩市は、「本年に入ってから、『良い隊員に良いお嫁さんを地元から』『良い除隊々員に良い就職を地元で』をモットーとして掲げ、四県の協力会を初め友好団体に協力を呼びかけ、共鳴を呼んだ。これは、自衛隊と県民郷土との結合を徹底させる願望によるものである」⁵⁾と、地域での防衛基盤育成事例として、退職者を地元根付かせる呼びかけを始めたことを報告している。

近年では、社会学や文化人類学の分野で民軍関係(civil-military relations)、特に自衛隊と市民、地域との関係を扱う研究が増えてきている。自衛隊内の女性自衛官に対する意識や政策、募集広報での女性表象を扱った研究⁶⁾や、海外派遣時における家族支援に関する研究⁷⁾、自衛隊の広報誌『MAMOR』で2009年11月から始まった特集「マモルの婚活」や自衛官との婚活パーティを研究したもの⁸⁾、自治体防災関係部局に在籍する自衛隊退職者の調査⁹⁾等が挙げられる。また、戦争と軍事を分けたうえで、「軍事に関する問題意識は戦争に関する問題意識に従属してきたといえる。より端的に言えば、防衛省・自衛隊に関する(広い意味での)社会学的なア

アプローチがあまり存在しなかった」¹⁰⁾とする野上元のような指摘が、自衛隊発足から60年以上経った現代になって現れていることは、戦後自衛隊研究の扱ってきた対象や問題意識の狭さと、それを克服する動きがあることを示すものといえよう。しかしながら、自衛隊の発足後から現在に至るまで、退職者を通じた防衛基盤育成という視点をもった政策がおこなわれてきたにもかかわらず、その中心団体である隊友会を主な対象として扱った研究は、拙著「自衛隊退職者団体の発足と発展—1960年代の隊友会を中心に—」¹¹⁾以外に見られない。憲法学においては、殉職自衛官が隊友会山口県支部連合会の合祀申請で山口県護国神社へ合祀されたことに対し、遺族が隊友会と合祀手続に協力した自衛隊山口県地方連絡部(国)へ合祀申請手続きの取消と損害賠償を求めた訴訟を題材とした研究¹²⁾に、当事者としての隊友会が取り上げられることがあるものの、これらは隊友会自体に関心が向けられたものではなかった。

こういった研究動向は、自衛隊に関連する政策形成過程や世論形成過程の中における自衛隊退職者団体という存在に対し、研究史上の空白が生じているといえるのではないだろうか。本稿ではこうした問題意識から、隊友会と自衛隊との関係を整理したうえで、隊友会発足から約20年間の月刊機関紙『隊友』を分析し、自衛隊への世論が厳しい時代に、隊友会に参加する自衛隊退職者が社会や自衛隊に対して見ていた視線と、隊友会活動の実像を明らかにしたい。

第1章 1960年代、70年代における隊友会

第1節 組織と人事

「社団法人隊友会定款」第5条によると、隊友会は「警察予備隊、保安隊、海上警備隊及び自衛隊に在籍して正常に退職し、本会の趣旨に賛同し、会長が入会を承認」¹³⁾した者を正会員とする団体である。他に、現職自衛官を加入対象とする賛助会員や特別会員、名誉会員¹⁴⁾が存在する。正会員数、賛助会

員数は図1の通りである。

正会員が1970年以降伸び悩むのに対し、1962年以降の賛助会員数は高い水準を維持している。1971年以降の正確な賛助会員数は不明であるが、1979年度の概数が26万人、1990年時点で「現職隊員のほぼ全員が賛助会員である」¹⁵⁾とされていることから、この間も賛助会員数は高い水準を維持していたと考えられる。賛助会員の多さの背景には、防衛庁・自衛隊による支援がある。1959年12月4日に出された「隊友会の支援要領に関する通達」では、隊友会を自衛隊協力団体の中核と位置づけ「1、自衛隊と会の精神的緊密感を醸成する。2、隊務運営に支障ない範囲の技術的支援、3、隊員に対する会の趣旨及び活動の普及、4、賛助会員加入による支援、5、退職者に対する会員加入支援」¹⁶⁾をおこなうとしている。これら以外にも、就職援護の依頼があった際の便宜や、機関紙への投稿、資料提供依頼に応じること等、多くの支援項目が挙げられている。また、賛助会員である現職隊員に対し、隊内での組織的な会費徴収がおこなわれた。「隊友会賛助会員加入等の細部要領に関する通達」¹⁷⁾では、各駐屯地に隊友会の世話担当者が置かれ、賛助会員名簿の取りまとめや会費の徴収、隊友会本部への送付等の作業をおこなうとされていた。隊友会は「国民と自衛隊とのかけ橋」となることを会の目的としている。「防衛の第一の条件は常に国民の心からの協力が必要であり、国民との間に心のつながりがなくてはならないはずである。このためには自衛隊生活を一度でも経験した者がそのくさびになって外部から自衛隊を援助することが必要」¹⁸⁾だとする自衛隊にとって、退職者団体の動向は、これだけの支援をするに足る重要な意味をもっていた。

隊友会は、1959年7月の発足以前に存在したそれまでの退職者団体とは異なり、防衛庁・自衛隊が設立に関与している。隊友会の前身団体である日本防衛協会の会長(当時)であった木村篤太郎が赤城宗徳防衛庁長官(当時)に全国組織推進への支援を要請したことを契機とし¹⁹⁾、防衛庁人事局人事二課長(当時)の門司良弼が支援の実務を担当、自衛隊地方連絡部が全国的な呼びかけをおこなった²⁰⁾。

図1 1959年度から1989年度までの『隊友』発行部数、防衛庁買上部数、賛助会員配付部数と隊友会正会員数、賛助会員数

	発行部数	防衛庁買上部数	賛助会員配付部数	正会員数	賛助会員数
1959年度		15,000		11,027	84,893
1960年度				12,141	120,413
1961年度	30,000			22,136	87,903
1962年度	40,000			28,346	167,362
1963年度	40,000			41,053	165,074
1964年度	55,000			55,727	178,550
1965年度	70,000			69,446	191,998
1966年度				77,338	200,500
1967年度	79,000			89,131	191,700
1968年度	85,000			94,395	195,300
1969年度	79,000			95,512	187,300
1970年度 a		18,900		98,498	190,600
1970年度 b	85,000	20,900	13,500	100,680	
1971年度	87,000	22,400	13,500	104,434	
1972年度	87,000	24,000	13,500	106,509	
1973年度	85,500	24,500	13,500	93,593	
1974年度	86,000	24,500	13,500	83,959	
1975年度	87,000	24,500	13,500	84,784	
1976年度	90,000	24,455	13,500	91,650	
1977年度	90,000	24,455	13,500	96,652	
1978年度	92,000	24,455	13,500	102,791	
1979年度	92,000	24,455	13,500	107,468	260,000
1980年度	100,000	23,500	14,646	114,449	
1981年度	102,085	23,500	14,646	118,841	
1982年度	101,734	23,500	14,646	119,924	
1983年度	104,714	23,500	14,646	123,095	
1984年度	107,260	23,500	14,646	129,892	
1985年度	112,650	23,500	14,646	135,097	
1986年度	116,000	23,500	14,646	140,034	
1987年度	119,200	23,500	14,646	141,064	
1988年度	123,900	23,500	14,646	146,959	
1989年度	126,400	23,500	14,646	149,866	

(注1) データの無い項目は空白としている。

(注2) 1970年度は『社団法人隊友会十年史』と『社団法人隊友会20年史』で数字が異なるため、『社団法人隊友会十年史』の数字を「1970年度 a」、『社団法人隊友会20年史』を「1970年度 b」とした。

出典：社団法人隊友会『隊友会十年史』（1973年）12頁、47頁、49頁、52頁、162頁、隊友会事務局『隊友会20年史』（1980年）28-29頁、38頁、86頁、社団法人隊友会『隊友会三十年史』（1990年）156頁、376-377頁より筆者作成。

さらに、全国的な呼びかけの実行指導者として、野瀬定市元将補と岡崎定雄元一佐を世話人とした。この他、大庭秀一元三佐、黒田栄治元一佐、神戸七蔵元一佐、田中清太郎元一尉、田中盛隆元将補、斉田忠夫元一尉、江藤一二元二佐ら7人の元幹部が地方世話人となる²¹⁾など、防衛庁・自衛隊による人事面での支援を受けて発足している。

初代会長の木村篤太郎（1959年～1974年）は元保安庁長官かつ、元防衛庁長官であり、二代目会長江崎真澄（1974年～1993年）、三代目会長池田行彦（1993年～2004年）、四代目会長瓦力（2004

年～2012年）まで、防衛庁長官経験者が会長に就任している。副会長には各幕僚長経験者が、常務理事、本部理事の多くは元将官が就任している。この他、顧問、相談役、参与に関しては、1963年7月19日に制定された「顧問・相談役及び参与の委託基準に関する内規」²²⁾で委嘱基準が定められている。これによると、顧問には「元国務大臣たる長官。特別会員中有力者その他会長が必要と認める者」、相談役は「元政務次官・元事務次官（次長を含む）、元統合幕僚会議議長、元副会長、特別会員中の有力者、その他会長が必要と認める者」、参与は「元参

事官、元付属機関の長（現に国家公務員である者を除く）、元陸海空将、元本部理事・監事、元支部連合会長、その他会長が必要と認める者」が委嘱基準となっている。

隊友会には友好団体が複数存在する。「郷友連盟、偕行社、水交会、隊友会による防衛連絡会」²³⁾が1963年5月から毎月開催されており、1969年には、「遺族会、援護会、軍恩連、靖国神社奉賛会、傷痍軍人会、偕行社、水交会」²⁴⁾を中心とした洗心会に合流²⁵⁾している。これとは別に、1970年より「統合幕僚監部及び各幕僚監部との意見を交換する目的」²⁶⁾で「統合幕僚会議事務局長、各幕僚監部幕僚副長と本会三副会長、常務理事並びに郷友連盟役員」²⁷⁾が参加する四木会が月1回開催されている。四木会に参加する隊友会副会長三名²⁸⁾は各幕僚長経験者が就任するポストのため、退職した先輩と現職の後輩が意見交換する場といえよう。これら以外に、防衛協会、防衛弘済会が友好団体と位置づけられている²⁹⁾。

第2節 事業

社団法人化後の隊友会の事業は、①防衛意識の普及高揚、②自衛隊諸業務に対する各種協力、③機関紙の発行及び出版、④会員の親睦に関すること、⑤正会員で不具廃疾となった者、死亡した正会員、又は殉職した賛助会員の遺族に対する援助、⑥会員の就職援護に関すること、⑦その他前条の目的を達成するにふさわしい事業³⁰⁾であり、1980年までに開始された主だったものとして下記が挙げられる。

募集協力（1959年～）

就職あっせん援護（1959年～）

隊友会遺族部会設置（1961年）³¹⁾

自衛隊殉職者の慰霊祭（1963年～）³²⁾

災害派遣隊員に対する慰問（1963年～）³³⁾

防衛講演会（1963年～）³⁴⁾

自衛隊遺族会が結成され、事務局が隊友会事務局内に置かれる（1965年）³⁵⁾

隊友団体保険（1966年～）³⁶⁾

住宅資金貸付制度（1967年～）³⁷⁾

自衛隊遺家族援護チャリティ音楽会開催（1967年～）³⁸⁾

第一回中央研修会開催（1968年～）³⁹⁾

街頭における広報写真展（1968年～）⁴⁰⁾

就職援護講習（1969年～）⁴¹⁾

隊員募集ポスターの貼付事業を防衛庁より委託（1970年～）⁴²⁾

予備自衛官の管理調査事業を防衛庁より委託（1973年～）⁴³⁾

広報映画上映事業を防衛庁より委託（1973年～）⁴⁴⁾

防衛トップセミナー（1975年～）⁴⁵⁾

英霊にこたえる会へ参加（1976年～）⁴⁶⁾

互助年金事業（1977年～）⁴⁷⁾

隊友会本部主催の海外研修（1977年～）⁴⁸⁾

上記の事業は、大まかに自衛隊協力・国防と、福祉・親睦事業に分けられる。これは、会の目的にある「親睦と相互扶助」と「国民と自衛隊のかけ橋」のどちらを優先するべきかと関係し、度々議論となってきた。特に、会勢拡大のために経済的な魅力と精神的な魅力を増やすべきという主張が数多く語られている。前者の主張は、隊友団体保険や住宅資金貸付制度、就職援護講習、互助年金制度といった福祉事業に反映されている。後者の主張は、元陸将で隊友会参与（当時）の岸本重一が、仮に会員数が50万になったことを想像し、「その力は極めて大きく社会的にも政治的にも無視することのできない存在となることは明らかである。『その一員となる』これこそ青年にとって何にも増して大きな魅力」⁴⁹⁾であるとしているように、隊友会の本部では、会が発展した際の政治への影響力を視野に入れていたといえよう。1973年4月1日付の『隊友』に掲載された北海道の特集記事で、ある正会員が隊友会に入った理由を「制服がいろいろなくてもいいことをオレたちが矢面に立って、正論で闘うのだ。私が隊友会に入った動機の一つは、反自衛隊勢力に対する反発からだ」⁵⁰⁾と述べているように、こうした魅力に惹かれる者もいた。一方で、精神的な魅力は隊友会への新規加入を遠ざける要因にもなってい

た。読売新聞による特集記事「日本の戦力・10年目の自衛隊」では、隊友会の会員数とその当時を除隊者総数の1割に達していないことを挙げ、「この種の親ぼく団体であっても、在郷軍人会の復活ではないかとか、予備役制度の準備運動ではないかというような疑心暗鬼の目で見られがちで、意識的に近づくことを避けている除隊青年も多い」⁵¹⁾としている。

1968年に制定された「第二次五カ年計画」を契機に、「自衛隊と国民のかけ橋」と、「会員の福祉・親睦・相互扶助」のどちらが会の目的として優先されるかといった議論がなされている。1968年3月におこなわれた全国理事会では、双方の優劣について、「依然として議論がわかれた」としながらも、「会の終局目的は何としても使命にあるので、方針として明文化する場合は『あわせて会員の福祉』とすることで諒承された」⁵²⁾としている。常務理事(当時)の野尻徳雄は、「第二次五カ年計画」が正式決定される前に解説記事を掲載し、「社会の健全化と発展に寄与し、国防について正しい世論の形成に努力することは、最も重要な隊友会活動」⁵³⁾だと述べている。会長(当時)の木村篤太郎に至っては、1969年2月の全国理事会で「親睦のみならずこれを通じて国家に尽力できなければ、隊友会としての存在価値がない」⁵⁴⁾と発言するなど、安保条約の改定を前に、その優劣は明確化された。会の目的の優先順位が明確化されたものの、福祉・親睦事業が否定されたわけではなく、就職援護講習(1969年～)や互助年金(1977年～)といった福祉事業が新設されてゆく。殉職自衛官遺族の援護や慰霊祭の開催等、双方に関わる事業もある。「除隊者に名誉と生活の安定を保障することは、直にもって退職自衛官に希望と誇りをもたせ、士気を鼓舞し、自衛隊の志願制度に魅力的基盤を与える」⁵⁵⁾と主張する隊友会にとって、2つの目的は根底で交わりあっているとも考えられる。

第3節 2種類の講演会

講演会事業としては、防衛講演会と防衛トップセミナーの二種類が存在する。双方ともに防衛思想の

普及高揚に関する事業であるが、これらは対象とする聴衆や開催都市に違いがある。防衛講演会は主に地方都市で開催され、一般市民及び高校生、青少年が主な参加者とされている。講師は1名か2名で、講演会と音楽会、映画上映会を組み合わせている場合もある。隊友会の主催行事であるが、開催する地域の地方連絡部や地方自治体、教育委員会、地方新聞社、地方放送局、日本郷友連盟、自衛隊父兄会⁵⁶⁾等が後援している場合⁵⁷⁾が多い。隊友会本部に統計のある開催数⁵⁸⁾は、1964年度19回、1965年度11回、1966年度10回、1967年度13回、1968年度14回、1969年度16回、1970年度12回、1975年度12回、1976年度15回、1977年度18回、1978年度18回、1979年度27回となっている。地方の防衛講演会は、地方政治や教育分野への人脈を広げるとともに、高校生に対する募集広報としての意味もあった。山梨県支部連合会では、1963年におこなった防衛講演会を特別会員勧誘と結びつけ、「自民党県議31名中の半数(中略)甲府市長・韮崎市長・甲府市議なども入会させた」⁵⁹⁾としている。この講演会は、隊友会山梨県支部連合会・防衛庁・山梨県庁の主催で開催され、県内の高校14校の200人に座席が配分された。高校生の集客には、「会員で読売新聞山梨支局員の笠井君が、事前に教育委員会や各学校長を説き回す」⁶⁰⁾など、地方政治や教育分野への浸透を図る目的があったといえる。

一方、防衛トップセミナーは「防衛思想の普及高揚のためには各界の有識者に対して防衛についての諸問題を認識させるべき」⁶¹⁾という問題意識から開催されたもので、『隊友』の記事中には「一流企業の社長、重役や部課長などリーダー級が各社そろって参加」⁶²⁾、「本田技研最高顧問の本田宗一郎氏も、二日間熱心に聴講」⁶³⁾、「各企業のリーダー、銀行、商社の幹部、ジャーナリスト、大学生、OL、現職自衛官らがいっしょに勉強」⁶⁴⁾と、参加者層の違いが強調されている。開催地区と初回開催年度は、東京(1975年～)、関西(1976年～)、北海道(1981年～)、東北(1981年～)、九州(1982年～)、中京(1983年～)、中国(1984年～)であり、そ

のほとんどが政令指定都市で開催⁶⁵⁾されている。主な内容は複数の講師による講演やパネルディスカッションであり、講演・討論集として『防衛開眼』が1976年3月から、東京での防衛トップセミナーの開催回ごとに出版されている。

第2章 機関紙『隊友』について

第1節 紙面構成と編集体制

『隊友』は隊友会の発行する月刊機関紙である。1959年8月より現在まで発行されている。隊友会の前身となる日本防衛協会の機関紙『自衛』から号数を引き継いでいるため、1959年8月の発刊時点で64号⁶⁶⁾となっている。紙面構成は、隊友会活動記事や自衛隊関連記事、隊友会役員による論説、現職自衛隊幹部による特集記事、海外情報、退職者による主張、地方組織の特集、思い出話、隊友会役員と有識者との対談記事、現職自衛官の座談会、軍事小説、4コマ漫画、隊友歌壇、隊友俳壇等が中心となる。1面コラム欄としては、「喜怒哀楽」（1959年7月）「一寸一言」（1959年8月～1965年6月）「発煙筒」（1965年7月～現在）が挙げられる。発刊当初はタブロイド判4頁であったが、1961年4月より8頁となり、1965年7月にはブランケット版4頁となる。その後、頁数を増加し、ブランケット版8頁～12頁の構成となっている。

発行部数と正会員、賛助会員数は図1の通りである。『隊友』は、発行部数の一部が防衛庁に買い上げられている。その数は1959年に15000部⁶⁷⁾、1970年に18900部⁶⁸⁾である。賛助会員への配布は数字のわかる1970年時点で13,500部となっており、賛助会員数に比べて著しく少ない。隊友会が1959年11月に実施した隊員との座談会では、『隊友』を「ここで初めて見ました」「幹部の人が見たあと、陸曹等には廻ってこない」⁶⁹⁾という実態が語られている。1970年度以降も、賛助会員配付数が13,500部－14,646部、防衛庁買上部数18,900部－24,455部と、賛助会員数を大幅に下回る部数となっている。

正会員への機関紙配布も十分にできていたとはいえない。図1にある通り、正会員数が『隊友』発行部数を上回る年が多々あった。1978年時点で、「『隊友誌』の完全配付」として「組織活動を通して最も大切な事は、機関紙“隊友”の必達である。会費は納入しても新聞も送付されない、のでは会員は横を向いてしまう。配付方法等については各県連でいろいろ苦慮されていることと思うが、山梨では全会員に郵送している。以前は、その発送事務につき地連にお願いしたり、会員が交代で行っていたりしたが、なかなか思うようにいかなかったこともあり、現在特定のバイト一名と会員の協力という方法で発送している」⁷⁰⁾といった記事が地方支部の紹介欄で掲載される現状があった。

発足当初の隊友会には、5名の事務員を擁する事務局が置かれた。取材活動は事務局の業務であった⁷¹⁾。だが、一般の記事や特集、座談会などを除けば、紙面の多くを隊友会員の投稿が埋めていた。1965年7月には、『隊友』に編集委員会が発足する。編集委員会のメンバーは、委員長が多田潔隊友会本部事務局長（当時）、委員には向井慶幸（内局官房広報課）、杉本康治（内局人事第2課）、西川勇内（内局厚生課）、今井正徳（陸幕第1部広報班）、栗山三秋（海幕広報班）、吉松秀二（空幕広報班）、松本重夫（隊友会東京総支部連合会理事、元サンケイ政治部記者、元陸上自衛隊幹部学校研究部）、川島一太（東京総支部連合会）、中積千恩（隊友会本部事務局）ら9名が就任⁷²⁾している。自衛隊関連記事が増えるほか、委員の多くが現職の自衛官や防衛庁職員であることが影響してか、自衛隊のイベント・運動競技の成果等を公表する「陸海空広報欄」や、幹部人事・名簿などの情報が適宜掲載されるようになる。1969年には、「記事内容において、隊友会自体に関するものが少なく、特に地方関係記事が不足しているため、防衛庁や自衛隊の関係記事で埋めている状況」⁷³⁾の対策として、各支部連合会に所属する通信員が設定された。

第2節 対談

1976年1月より、江崎真澄会長（当時）と著名

人が対談する形式で「希望対談」の連載が始まる(表1)。『隊友』の2面、3面を中心に、紙面の2頁分が使われる大型企画であった。休載を挟みながら1983年11月まで連載。1977年7月から1978年12月までの期間は「続希望対談」、1986年1月、1987年1月には「新春対談」として掲載されている。これらの対談は『江崎真澄対談集 朝はかならずくる』(1977年)、『江崎真澄対談集第2集 たしかな明日へ』(1980年)、『江崎真澄対談集第3集 明日をつくる歩み』(1980年)として書籍化されている。登場する人物は、現役の内閣総理大臣、防衛庁長官、防衛大学校長といった関係者だけでなく、森繁久彌、山田五十鈴、三船敏郎ら芸能人や、春日野清隆日本相撲協会理事長(当時)、小島孝治全日本女子バレーボール監督(当時)、朝比奈宗源臨濟宗円覚寺管長(当時)、関枚翁天龍寺管長(当時)といったスポーツ関係者、宗教者まで幅広い。本田宗一郎本田技研最高顧問(当時)や豊田英二トヨタ自動車工業株式会社社長(当時)といった、自衛隊出身者の再就職先大手企業からも対談者が選ばれている。対談集の第2集及び第3集出版時には、対談参加者を中心に、政治家や財界人等「約3千人」⁷⁴⁾が参加したとする出版祝賀パーティが開催されており、「希望対談」が有力な自衛隊支援者の結節点として機能していたといえよう。

こうした対談者の中で異色といえるのが、1977年3月15日付『隊友』で江崎真澄と対談⁷⁵⁾した堀江正夫である。対談当時、隊友会本部理事兼東京都総支部連合会長という肩書であったが、1977年7月の第11回参議院議員通常選挙に出馬し、当選している。この前後の『隊友』には、毎月のように堀江正夫の記事が掲載⁷⁶⁾されていたことから、対談への登場も選挙に向けた知名度向上を目的としたものであろう。大平正芳自民党幹事長(当時)や船田中元衆議院議長、坂田道太元防衛庁長官、元航空幕僚長で参議院議員(当時)の源田実らも参加した「堀江正夫と歩む会」のあいさつで、隊友会会長の江崎真澄が「アメリカのカーター新政権をみても、防衛、外交の専門家が大統領をとりまわっている。わが国は、防衛の専門家は源田実先生一人だ。外交の

専門家も、政界では山田久就氏(元駐ソ大使、外務事務次官)一人だけである。こんなことで、一番大事な国の安全保障が確立できるはずがない」⁷⁷⁾と述べるなど、自衛隊制服組出身で、自衛隊に関する争点を語るの国会議員選出への期待があったと考えられる。

1978年7月19日の記者会見で「わが国が奇襲攻撃を受けた場合には、自衛隊として第一線の指揮官の判断で超法規的に行動しなければならないだろう」⁷⁸⁾と発言し、7月25日に統合幕僚会議議長を辞任という形ではあるが事実上解任された栗栖弘臣は、1978年8月15日付の「希望対談」に登場している。対談の中で栗栖は、発言の真意として「シビリアンコントロールの発動たる防衛出動前の状態は、正当防衛、緊急避難という平時の個人の法理論以外には、何の取り決めもありませんので、それではイザという場合に対応し切れないことがある。その時は、第一線現地としては、ある程度決心して行動せざるを得ない。それは超法規的にならざるを得ないといったわけです。(中略)ところが、超法規的というのが、マスコミの手に乗って独り歩きを始めまして」⁷⁹⁾と語っている。そのうえで、防衛庁事務次官の経験者⁸⁰⁾から「今回の問題(栗栖氏の提起した問題)は防衛庁内部で二十数年来、議論し尽くされている問題だ。それを内局が取り上げなかったことに問題がある。ああいう風に外に出し、国民の議論の場に出さねば、この問題は解決しない。あなたの意見に同感だ」とする手紙が届いたと紹介している。江崎真澄は「政府与党がともに有事立法の積極的な検討に入ったのですから、犠牲は大きかったが、栗栖さんの第一の念願は叶えられつつある。防衛庁も二年間かけて本格的な研究にふみ出しました。栗栖さんがほんとうのことを言わなければ、とうてい踏み切れませんでしたね」⁸¹⁾と、栗栖発言による犠牲と成果を評価している。

隊友会は8月2日に野尻徳雄、内田一臣、中村龍平、白川元春ら副会長が丸山事務次官と意見交換をおこない、その中で「出動命令受領前のものを含む有事法制制定の促進」、「政治優先の実行を挙げるため=国防会議の充実とともに、国会内に、安全保

障、防衛政策の基本を責任をもって審議する防衛特別委員会の整備、「長官の適切な監督、指導が望まれるが、それには制服の意見を積極的に吸収して政策面に十分反映、調整されたい」⁸²⁾との要望をしている。また、江崎真澄が「自民党政調会長として、七月二八日『有事の際の非常立法を検討するように』と自民党国防部会（源田実部会長）と安全保障調査会（坂田道太会長）に指示した」⁸³⁾ことを挙げ、「これを契機に禍を転じて福とすべく念願している」⁸⁴⁾とするなど、有事法制や制服組の権限強化に弾みをつけたい意図があったといえる。

国会においても栗栖発言を擁護する声が一定数存在し、「参院自民党は、二五日の執行部会で、栗栖統幕議長の解任問題を協議した。特に栗栖議長が指摘した超法規的行為については『有事の際、国防会議、閣議を開いては即応できない』と栗栖発言を擁護する意見が大勢を占めた」⁸⁵⁾とされている。参議院には隊友会が「防衛の専門家」とする源田実、堀江正夫ら2名の自衛隊出身自民党議員が在籍していたことも影響したであろう。

第3節 座談会

隊友会員や現職自衛官、防衛庁職員らの座談会が記事になることもあった（表2）。地方組織や企業支部の紹介、政治的争点に関するものが大半で、1965年までは頻繁に掲載されていたが、それ以降は年に1～2回のペースとなっている。1961年から1964年にかけて、隊友会本部役員が各都道府県連を訪れ、地方組織の役員と地方連絡部の職員と共に座談会をおこなう企画記事が掲載されている。千葉県や静岡県のように実績を上げている取り組みが紹介されることもあれば、埼玉県や兵庫県、大阪府、京都府では隊友会の参加者は1名で、地方連絡部からの参加者の方が多いような実態もあった。

隊友会活動の地域差は1970年代後半においても都道府県別の正会員数に表れていた。1979年の第19回定期総会で報告された「会勢概況」⁸⁶⁾では、1979年3月31日現在での都道府県別正会員数が掲載されている。これによると、最も正会員数の多い都道府県は愛知県で8,482人、次いで東京都

7,775人、福岡県6,901人となっている。北海道は5都市ごとに掲載されており、札幌2,528人、帯広1,470人、千歳1,018人、旭川908人、函館824人で合計6,748人となる。沖縄県が205人と最も少なく、福井県431人、石川県594人、富山県625人、奈良県667人、滋賀県751人、島根県759人、愛媛県796人、高知県818人と続く。全体的に都道府県の人口や自衛隊施設の設置数に比例して正会員も増える傾向にあるが、九州は会員数が多く、熊本県4,924人、長崎県3,385人、大分県2,650人である。一方で、舞鶴基地、福知山駐屯地、桂駐屯地、大久保駐屯地、宇治駐屯地、経ヶ岬分屯地と6カ所の施設を有する京都府が1,574人のような事例もある。

第4節 広告

1959年7月から1980年3月までの広告数を、サービス・商品の宣伝、求人、その他の3種類に分類し、表3としてまとめた。発足当初の企業広告は、東邦生命や協榮生命、富士銀行、日本大学通信制等、ごく一部の企業や大学が販売促進、進学用の広告を掲載していただけであった。1964年になると広告掲載企業数が少しずつ増え、少数ではあるが自衛隊退職者向けの求人広告も掲載されるようになる。1967年には広告の多くが求人広告となり、ブランク版の頁数が増える1968年以降は、広告のみの面が中に入っている紙面構成が多く見られるようになる。この時期には「中部地区優良企業案内」といった形で、地区ごとに中小企業の求人広告をまとめた頁も現れる。1970年頃から、消費者としての隊友会員を意識した広告が増加する。特に、北海道の土地を資産運用目的で販売する広告が目立つようになる。他には、家や宝石、旅行商品、健康器具の販売、銀行・証券会社の商品宣伝、資格の通信講座等が挙げられる。1975年から1979年にかけて求人広告数が減少するが、1979年以降は徐々に求人広告が紙面に戻るようになる。隊友会は、この時期の求人広告減少の理由を「石油ショックの不況」⁸⁷⁾によるものとしている。

1966年以降の1月付紙面には、紙上名刺交換企

図2 隊友会の年度収入合計及び機関紙収入内訳

	売上収入	広告収入	前年度繰越金	年度収入合計
1959年度				
1960年度	450,000		12,240,160	15,710,363
1961年度	2,200,000		15,031,206	24,293,391
1962年度	2,702,800		14,698,936	28,697,602
1963年度	2,472,500		14,902,865	29,133,076
1964年度	2,400,000		14,702,656	30,007,102
1965年度	3,211,500		4,930,776	32,757,401
1966年度	3,803,072		12,686,561	31,412,191
1967年度	4,509,090		8,192,922	26,459,442
1968年度	7,928,861		6,930,578	51,085,385
1969年度	16,415,788		8,507,205	57,593,462
1970年度 a	3,630,000	13,900,000	6,538,475	63,645,276
1970年度 b	3,655,000	14,732,000	6,538,475	41,509,000
1971年度	2,758,000	15,053,000	4,225,000	36,378,000
1972年度	5,753,000	15,654,000	3,823,000	43,250,000
1973年度	4,847,000	31,625,000	5,544,000	66,944,000
1974年度	7,138,000	20,114,000	5,204,000	66,960,000
1975年度	7,509,000	10,384,000	8,857,000	92,502,000
1976年度	7,614,000	7,731,000	13,030,000	101,439,000
1977年度	8,274,000	8,248,000	16,738,000	123,968,000
1978年度	8,626,000	5,165,000	14,726,000	139,783,000
1979年度	8,171,000	9,491,000	22,769,000	161,376,000
1980年度	9,240,000	12,360,000	23,850,000	183,276,000
1981年度	9,429,000	19,135,000	30,765,000	202,830,000
1982年度	8,849,000	29,031,000	40,656,000	200,782,000
1983年度	8,816,000	18,089,000	35,990,000	228,193,000
1984年度	8,992,000	7,279,000	52,436,000	241,909,000
1985年度	8,576,000	13,088,000	52,409,000	280,883,000
1986年度	8,546,000	20,355,000	57,753,000	306,332,000
1987年度	8,566,000	23,190,000	67,253,000	312,420,000
1988年度	8,681,000	20,658,000	67,350,000	293,994,000
1989年度	8,633,000	22,533,000	43,681,000	271,547,000

(注1) データの無い項目は空白としている。

(注2) 1969年度までは各年度収支決算書に「機関紙収入」項目しかないため、便宜上、広告収入欄を空白としている。

(注3) 1970年度は『社団法人隊友会十年史』と『社団法人隊友会20年史』で数字が異なるため、『社団法人隊友会十年史』の数字を「1970年度 a」、『社団法人隊友会20年史』を「1970年度 b」とした。

出典：社団法人隊友会『社団法人隊友会十年史』（1973）213-235頁、隊友会事務局『社団法人隊友会20年史』（1980）50頁、社団法人隊友会『社団法人隊友会三十年史』394-395頁より筆者作成。

画として個人、団体が名刺を掲載している。1978年から1980年は100件を超える名刺が掲載されており、そのほとんどが隊友会員の個人名刺や友好団体に加え、これまで広告を掲載したことのある企業であった。1979年、1980年は「隊友会特別会員加入の各社ご芳名」として紙面の1頁全体を使って特別会員である企業名を掲載している。

広告の掲載は、隊友会の大きな収入源となっていた時期もある。機関紙の収入内訳と年度収入の合計、前年度繰越金を図2としてまとめた。発足後30年

間で最も広告収入の多かった1973年度は、広告収入だけで年度収入合計の約半数にも達している。1975年から1980年にかけては広告数の減少に伴い広告収入も激減するが、団体生命保険手数料や書籍出版、講演会収入といった他の事業収入が徐々に増え、正会員費、賛助会員費の段階的な値上げ⁸⁸⁾も影響し、収入全体の中で広告収入の占める割合は減少していく。

第5節 社説、論説欄

社説に該当するものとしては、1面もしくは2面に掲載された「われらの主張」「年頭提言」「隊友提言」「新春提言」欄が挙げられる。また、発刊当初から隊友会本部役員等の署名付き論説がタイトルを変えながら掲載されることが多いため、これらを主要論説欄として、合わせて表4とした。1963年から1965年頃にかけては、元幹部でない隊友会員や曹・士階級の現職自衛官らの投稿が1面に掲載されることもあったが、全体でみると本部役員以外の投稿は後ろの面に掲載される傾向があった。1970年代中頃以降は論説欄が4面以降に集中するため、本部役員の投稿であっても、1,2面に掲載されることは稀である。

1967年2月に「われらの主張」欄が登場する。署名は無いことが多く、テーマの多くは自衛隊に関する争点への主張である。掲載されない月もあり、1968年5月に終了する。1969年1月に「年頭提言」、同年2月以降には「隊友提言」が掲載され、1972年11月まで続く。「年頭提言」及び「隊友提言」は、隊友会役員が署名付きで政治的主張や解説をおこなうコーナーとなっている。他に社説と呼べるコーナーはほとんど存在しないが、全期間を通じて、政治的主張や見解、解説が隊友会役員の署名付きで掲載されることが多い。

論説欄で数多く言及されるテーマの一つに憲法があった。隊友会の発足当初は、正面から憲法を批判する記事は見当たらなかったが、1962年の定期総会で木村篤太郎が「平和憲法護憲運動の根本はどこにあるのでしょうか。私は表面のことはぎ装（ママ）であって革命運動の一部、社会革命の一部ではないか（中略）国家の防衛上必要なら、如何なる兵器も持てる。しかし、はっきりさせるためにやはり憲法9条をすみやかに改正すべきである」⁸⁹⁾と述べたことで、憲法9条への批判が紙面に多く見られるようになる。一方、隊友会参与（当時）の筒井竹雄は、1963年の参与会で「憲法九条の改正も国民投票をやった場合、本当に勝てるかわからないから踏み切れない。時日を経なければ戦争の傷痕は治らない。自衛隊は国民の反対をうけながら建軍して

行かなければならない運命にある」⁹⁰⁾と発言するなど、内部には慎重論もあった。

解釈改憲が定着していく1960年代後半においても、木村篤太郎を中心に改憲論が訴えられる。1967年の全国総会では、「自衛隊が恵庭事件において、一部法律学者どもの無責任きわまる法理論にふり回された。この矛盾は、すべて現行の憲法の矛盾から発したものと解釈すべきで、この押し付けられた憲法を何とか改正しなければならない」⁹¹⁾と述べている。こうした改憲論と平行するように、憲法への批判はするものの、明確な改憲を打ち出さない論調が次第に増加する。恵庭事件一審判決の前後となる1967年2月、3月、5月号の1面社説「われらの主張」欄のテーマは恵庭事件であった。ここでは、「現に国家の意思として自衛隊法が制定され、自衛隊はそれに基づいて既に十有数年を経過している。一部勢力の反対にも拘わらず自衛隊は既に国民の事実に認認を受けている」⁹²⁾、「われわれは自衛隊の合憲を固く信じて、これらの勢力に対決するため、全国の隊友を糾合し勇気をもって立ちあがらなければならぬ」⁹³⁾、「あわよくばこの機会に一気に最高裁の合憲判決をえて、とひそかにねがったものもあつたかも知れないが、もともと無理のあるこの事件によってではなくて、やがて真正面から内外ともにハッキリなつとくのゆく合憲判決のくるのをまってもよいのではないか。裁判のゆくえにかかわらず、価値ある国家の制度として、厳として存在し公認されていることを確信して訓練の精到をめざそう」⁹⁴⁾といったように、自衛隊が合憲であると主張したうえで、自衛隊を違憲とする勢力への対抗を訴えてはいるが、解決策としての明文改憲は書かれていなかった。

長沼ナイキ訴訟に関する『隊友』紙上の議論においても、同様の傾向があった。自衛隊を違憲と認定した1973年9月の一審判決後の特集面で、隊友会常務理事の植弘親孝は「憲法で自衛隊問題を明確にするべきではないか」という問いを立てたうえで「今回の判決を機として大いに議論を竭くし、国民の合意を得られる様努力すべきである。その方法論としては、憲法の不備を補いつ疑義なからしめる

様に改正するのがよいが、それが早急にできない状況においては現行憲法の解釈を統一してゆくことである」⁹⁵⁾と述べており、改憲の必要性を主張しながらも具体的な行動の呼びかけは無く、同時に妥協策を語る状況であった。元陸将で弁護士かつ隊友会本部理事(当時)の口野昌三は、1975年7月に高裁での経過報告を寄稿している。一審判決を批判しながら、「我々は上級審における裁判官の正しい判断による勝訴を確信しつつ、堂々と胸をはって、自衛隊の成長を支援しよう」⁹⁶⁾と主張するが、こちらも改憲には触れられていない。1974年3月の『隊友』紙上インタビューで自民党国防部長(当時)の源田実が「自衛隊員の士気を高めるには、一日も早く憲法を改正して、自衛隊を国防軍に改編し、隊員を軍人として処遇するとともに、国民全部が国防の義務を負うことをはっきり明記すべきです」⁹⁷⁾と述べているが、こちらも行動の呼びかけ等は無く、1970年代の『隊友』において、このような改憲に関する記述は稀であった。

1973年に発行された『隊友会十年史』では、「自主憲法の制定に努力するの必要を感じず」⁹⁸⁾としながらも、取り組みについては「会員の意識を高めつつ国民に対する啓発を推進し改正気運の醸成を推進」⁹⁹⁾したいと書くのみであった。この理由として、「会員意識も多様であるのみならず、防衛庁(自衛隊)との関係において、実行に当たっては調整を必要とする」¹⁰⁰⁾としている。1980年発行の『社団法人隊友会20年史(70年代の足跡)』には、改憲に関する記述は存在しない。解釈改憲が定着した70年代において、明文改憲へ向けた行動を起こすことは、会員の合意形成が難しいだけでなく、その母体である防衛庁の政策にも反することになりかねないということだろう。

おわりに

本稿は、1960年代、70年代における自衛隊史の中に隊友会の存在を位置づけたうえで、機関紙『隊友』の主要論説記事、座談会、対談、広告を目録化

し、隊友会に集まる自衛隊退職者の言説を分析したものである。

隊友会はその発足時から防衛庁・自衛隊による人事面・金銭面での支援を受けており、都道府県ごとに活動の差はあったものの、会員数の増加と共に、会の活動内容や事業も増加していく。自衛隊内部では、隊友会発足時点で退職者を通じた地域社会との関係性構築が意識されており、自衛隊支持者の増加や自衛官の社会的地位向上の先には、間接侵略や直接侵略への対処能力向上が視野に入れられていた。

隊友会の目的には「国民と自衛隊とのかけ橋」と「親睦と相互扶助」の2つがあり、1960年代後半に、前者の優位が明確化される。しかし、自衛隊の外郭団体、国防組織としての性格が濃くなるほど、それを魅力と思わない層から敬遠される要因となっていた。その結果、現職自衛官のほぼ全員が賛助会員となっているにもかかわらず、正会員数は10万人を前後に伸び悩んだ。1970年に入ると、隊員募集ポスターの貼付事業、予備自衛官の管理調査事業、広報映画上映事業を防衛庁から委託される等、自衛隊の外郭団体としての活動が増加する。隊友会のこうした性質を踏まえると、自衛隊退職者の中でも国防への意識の高い者が加入していたといえよう。

発足時から発行されてきた『隊友』は、その多くが自衛隊退職者と現職自衛官、防衛庁内で読まれていた機関紙である。紙面には自衛隊に関する政治的争点の解説や主張、自衛隊退職者への檄文のようなものまでが存在し、自衛隊関係者の世論形成を担うと同時に、政治的言動に制限のある自衛官の代弁者としての機能があった。1970年代後半には、「希望对談」や防衛トップセミナーの開催といった、各界の大物との交流が増える。この頃には、英霊にこたえる会への参加や海外研修の開催、出版事業の増加もあり、対外的なアピールが本格的に推進されていた。

自衛隊の歴史は、政治的な対立を常に伴っていた。隊友会は憲法9条に関わる問題や自衛隊に関する世論形成を担う運動団体としての側面があり、現代に至るまでの自衛隊に関する政策決定に、当事者性を持つアクターとして影響を与えてきた。1960年、

70年代は、隊友会が自衛隊退職者団体として対外的な影響力を発揮する基盤を形成してきた時期といえる。

本稿は、自衛隊退職者の動向を紐解く史料として『隊友』を分析したものであるが、課題も多い。現代に至るまでの自衛隊関連政策に影響力を持ってきたであろう隊友会所属国政政治家の動向は一部しか触れられていない。1977年から始まった海外研修で、隊友会が目指すべきモデルケースとなりうる他国の在郷軍人会と交流し、隊友会の理想像を検討していく過程は、「普通の軍隊」になろうとしてきた自衛隊の歴史にも関連するものであり、これらを主なテーマとして別稿を期したい。また、隊友会以外の自衛隊関連団体との関係性や、隊友会活動が地域社会・地域経済・地方政治へ与えた影響の検討は不十分であり、今後、自衛隊施設立地地域に特化した調査の必要がある。

【謝辞】

本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものである。最後に、本研究に対して貴重な史料を提供いただいた公益社団法人隊友会に厚く御礼を申し上げる。

【注】

- 1) 「国防の基本方針」(1957年5月20日 閣議決定)。
- 2) 1960年12月より社団法人。2008年に特例民法法人、2011年4月からは公益社団法人となっている。
- 3) 「隊友会規約」自衛 1959年7月20日付 2面。
1960年12月の社団法人化に際して、「本会は、国民と自衛隊とのかけ橋として、相互の理解を深めることに貢献し、もって我が国の平和と発展に寄与すると共に自衛隊退職者の親睦と相互扶助を図り、その福祉を増進させることを目的とする」に変更されている。「社団法人隊友会定款」第3条より。
- 4) 新宮陽太「年頭所感」幹部学校記事編さん委員会編『幹部学校記事第10巻1月号』(1962)、7頁。
- 5) 藤原岩市「第12師団における防衛基盤の育成について」幹部学校記事編さん委員会編『幹部学校記事第12巻7月号(第130号)』(1964)、15頁。
- 6) 佐藤文香『軍事組織とジェンダー 自衛隊の女性たち』(慶應義塾大学出版会、2004)
- 7) 河野仁「自衛隊と家族支援—地域支援力の構築に向けて—」田中雅一編『軍隊の文化人類学』(風響社、2015)、95-135頁。

- 8) 福浦厚子「自衛隊研究の諸相：民軍関係と婚活」関西社会学会『フォーラム現代社会学 16巻』(松香堂書店、2017)、116-130頁。
- 9) 中林啓修、辻岡綾「退職自衛官の自治体防災関係部局への在職状況と課題 本人および自治体防災関係部局への郵送質問紙調査の分析を通して」一般社団法人地域安全学会『地域安全学会論文集31巻』(2017)、261-270頁。
- 10) 野上元「『戦争社会学』が開く扉」戦争社会学研究会編『ポスト「戦後70年」と戦争社会学の新展開』(勉誠出版、2017)、28頁。
- 11) 津田壮章「自衛隊退職者団体の発足と発展—1960年代の隊友会を中心に—」立命館大学法学会『立命館法政論集11巻』(2013)、274-315頁。
- 12) 例えば、後藤光男「政教分離原則の脱法行為(三)—自衛官合祀拒否訴訟をめぐる—」『早稲田社会科学研究40号』(1990)、167-194頁、尾崎利生「信教の自由 殉職自衛官合祀違憲訴訟を中心にして」東京家政学院大学『東京家政学院大学紀要29号』(1989)109-130頁、芦部信喜・井門富二夫・樋口陽一「自衛官合祀と信教の自由(自衛官合祀訴訟大法廷判決<特集>)」『ジュリスト916号1988年09月号』(1988、有斐閣)、4-20頁、等が挙げられる。
- 13) 社団法人隊友会『社団法人隊友会十年史』(1973)、516頁。
- 14) 同上、516頁。
- 15) 社団法人隊友会『社団法人隊友会三十年史』(1990)、117頁。
- 16) 昭三四、一二、四陸幕発募第一三三三三「隊友会の支援要領に関する通達」、社団法人隊友会、前掲注(13)所収、530-532頁。
- 17) 昭三五、一、一四陸幕発募第三三三三三「隊友会賛助会員加入等の細部要領に関する通達」、同上所収、534頁。
- 18) 「隊友会について」(陸幕発第一二七七号別紙) 同上所収、546頁。
- 19) 同上、6頁。
- 20) 同上、6頁。
- 21) 同上、6頁。
- 22) 「顧問・相談役及び参与の委託基準に関する内規」 同上、54頁。
- 23) 同上、196-197頁。
- 24) 同上、196-197頁。
- 25) 同上、196-197頁。
- 26) 同上、82頁。
- 27) 同上、82頁。
- 28) 1976年度より副会長が4名となっている。内訳は、陸2名、海1名、空1名であった。隊友会事務局『社団法人隊友会20年史(70年代の足跡)』(1980)、39頁。
- 29) 社団法人隊友会、前掲注(13)、197頁。
- 30) 隊友会「社団法人隊友会定款」 同上、515-516頁。
互助年金事業の実施に伴い、1977年に「会員の福祉厚生に関すること」が追加されてる。定款の改正については、隊友会事務局、前掲注(28)、12頁参照。

- 31) 「手をとりあって力強く」遺族部会が発足」隊友 1961年12月1日付 2面。
- 32) 社団法人隊友会、前掲注(13)、177頁。
- 33) 同上、156-157頁。
- 34) 同上、132-133頁。
- 35) 同上、112頁。
- 36) 同上、166頁。
- 37) 隊友会賛助会員であり、3年以内の退職が予定され、退職後は正会員になると確約することを条件に、最高300万円まで借入れできる制度。融資状況は、1967年30件、68年105件、69年156件、70年256件であった。同上、168頁。
- 38) 同上、189-190頁。
- 39) 同上、123-129頁。
- 40) 同上、152-153頁。
- 41) 実社会に役立つ知識及び教養科目について講習することを目的としたもので、原則無料。
講習内容は、中小企業診断員受験オリエンテーション(14時間)、経営診断士資格与講座(20時間)、伝票会計管理士養成講座(40時間)、社会教養講座(26時間)等である。同上、169頁。
- 42) 同上、150-152頁。
- 43) 「予備自衛官の管理事務 事務次官通達出る 一部を隊友会に委託」隊友 1973年8月1日付 1面。
- 44) 隊友会事務局、前掲注(28)、4頁。
- 45) 「第1回防衛トップセミナー」隊友 1975年10月1日付 1面。
- 46) 「英霊にこたえる会 その一員としての隊友会の活動について」隊友 1976年9月15日付 6面。
- 47) 隊友会事務局、前掲注(28)、5頁。
- 48) 「隊友会第一回海外研修団 ヨーロッパで見たこと、感じたこと… 各国力強い国防体制 愛国心劣る日本の将来憂う」隊友 1977年10月15日付 1面。
- 49) 岸本重一「一員になる」ことこそ魅力ではないか」隊友 1963年3月1日付 1面。
- 50) 「道内隊友の胸の中を聞く 現職は世論に遠慮 しかし隊友は断固闘う 自衛隊に代わり」隊友 1973年4月1日付 3面。
- 51) 「日本の戦力 10年目の自衛隊③ 除隊と同時に縁切れ “失業救済事業”との声も」読売新聞 1960年8月10日付朝刊 2面。
- 52) 「長期計画を着実に実行 42年度全国理事会終る」隊友 1968年5月1日付 1面。
- 53) 野尻徳雄「次期五ヵ年計画の考え方(下)」隊友 1968年1月1日付 5面。
- 54) 「安保秒読みの段階 木村会長 時局重大性を強調」隊友 1969年3月1日付 1面。
- 55) 「われらの主張 除隊者を軽視するな 物心両面の処遇を望む」隊友 1968年5月1日付 2面。
- 56) 2017年1月より公益社団法人自衛隊家族会となっている。
- 57) 社団法人隊友会、前掲注(13)、132-141頁。
- 58) 同上、132-141頁、及び、隊友会事務局、前掲注(28)、78頁より。1971年から1974年はデータが無い。
- 59) 「山梨県防衛講演会 県民と高校生を対照(ママ)に」隊友 1963年9月1日付 3面。
- 60) 同上。
- 61) 隊友会事務局、前掲注(28)、5頁。
- 62) 「勉強になりました」第一回防衛トップセミナー」隊友 1975年10月1日付 1面。
- 63) 「第3回防衛トップセミナー開く」隊友 1977年3月15日付 1面。
- 64) 「第4回防衛トップセミナー開く」隊友 1978年3月15日付 1面。
- 65) 社団法人隊友会、前掲注(15)、407-417頁。
- 66) 自衛 1959年7月20日付1面、及び、隊友 1959年8月20日付 1面より。
- 67) 社団法人隊友会、前掲注(13)、12頁。
- 68) 同上、162項。1970年度の内訳は、共済組合10,000部、募集関係6,600部、広報関係2,300部であった。
- 69) 「座談会」隊友 1959年11月20日付2面。
- 70) 「「隊友誌」の完全配付」隊友 1978年6月15日付 5面。
- 71) 「事務局便り」隊友 1959年9月20日付 4面。
- 72) 編集委員会メンバーの肩書は、いずれも当時のものである。「隊友」編集委員会 大版を機会に発足」隊友 1965年7月1日付 1面。
- 73) 「隊友通信員決る」隊友 1969年1月1日付 8面。
- 74) 「江崎真澄対談集 出版祝賀パーティ 各界から約3千人が出席」隊友 1980年1月15日付 9面。
- 75) 「江崎隊友会会長・堀江正夫氏と対談」隊友 1977年3月15日付 6面。
記事中に「希望対談」とは書かれていないが、江崎真澄会長との対談形式のため「希望対談」に準ずるものとして扱っている。
- 76) 例えば、以下のような記事が挙げられる。植村栄一「堀江正夫君への期待」1977年1月15日付 8面。「堀江正夫をはげます会開く」隊友 1977年2月15日付 5面。「堀江正夫兵庫県後援会スタート」隊友 1977年5月15日付 5面。
- 77) 「「堀江正夫と歩む会」開く」隊友 1977年4月15日付 5面。
- 78) 「自衛隊 超法規的行動ある 奇襲攻撃なら 統幕議長語る」読売新聞 1978年7月20日付 朝刊 2面。
- 79) 「希望対談 前統幕僚会議議長 栗栖弘臣氏大いに語る 自分自身の防衛哲学を持って！ 有事立法検討へ政府・与党動き出す 重要な国防の問題点 国民と共に考える必要を提起」隊友 1978年8月15日付 2面。
- 80) 記事中に氏名は記載されていない。
- 81) 「希望対談 前統幕僚会議議長 栗栖弘臣氏大いに語る 自分自身の防衛哲学を持って！ 有事立法検討へ政府・与党動き出す 重要な国防の問題点 国民と共に考える必要を提起」

隊友 1978年8月15日付、3面。

- 82) 「栗栖氏問題 率直に意見交換 丸山事務次官と会談 野尻、内田、中村、白川各福会長」隊友 1978年8月15日付 1面。
- 83) 同上。
- 84) 同上。
- 85) 「“栗栖処分”の撤回を 参院自民は擁護論大勢」読売新聞 1978年7月26日付 朝刊2面。
- 86) 「隊友会会勢概況」隊友 1979年6月15日付 4面。
- 87) 隊友会事務局、前掲注(28)、47頁。
- 88) 正会員費は1960年度300円、1972年度500円、1974年度1,000円、1978年度1,500円、1983年度2,000円となっている。賛助会員費(幹部)は1960年度100円、1975年度200円、1979年度300円。賛助会員費(曹・士)は1960年度50円、1975年度100円、1979年度150円と、段階的に値上げされている。社団法人隊友会、前掲注(15)、37頁より。
- 89) 木村篤太郎「国の安全を啓蒙せよ 定期総会挨拶」隊友 1962年9月1日付 2面。
- 90) 筒井竹雄「戦争はいやだの国民感情をいかにほごすか」隊友 1963年6月1日付 5面。
- 91) 木村篤太郎「木村会長挨拶要旨」隊友 1967年6月1日付 1面。
- 92) 「われらの主張 恵庭事件を注視 団結をもって対決せよ」隊友 1967年2月1日付け 1面。
- 93) 「われらの主張 自衛隊は合憲である 勇気をもって立ち上がれ」隊友 1967年3月1日付 1面。
- 94) 「われらの主張 恵庭事件の教訓 格調高い歩みを続けよう」隊友 1967年5月1日付1面。
- 95) 植弘親孝「憲法と自衛隊 長沼判決問答」隊友 1973年10月1日付 5面。
- 96) 口野昌三「時の話題 長沼裁判について」隊友 1975年7月15日付 4面。
- 97) 「インタビュー話題の人 自民党国防部長 源田実氏 自主憲法の制定を」隊友 1974年3月1日付 3面。
- 98) 社団法人隊友会、前掲注(13)、202頁。
- 99) 同上。
- 100) 同上。

表1 『隊友』における「希望対談」「続希望対談」「新春対談」一覧

発行年月	対談者	肩書	見出し
1976年1月	本田宗一郎	本田技研最高顧問	“自衛隊は世界に冠たる存在だ”(本田氏) / “われら自衛隊を愛す”心意気びつたり 本田宗一郎氏と江崎会長 / 自らを楽しむ絵心 “人の悪口、言わなくてすむ” / 防衛意識高い外国 / 人間は自衛本能体 / 隊員諸君! 胸を張って行け / “努力が物をいう時代が来た”(江崎氏) 幼児に教えられるミスターホンダの体験談 / 常に夢と若さを…青年が世の中を前進させる / 景気上昇には時間がかかる
1976年2月	盛田昭夫	ソニー会長	盛田(ソニー会長) 江崎(隊友会会長) 両氏大いに語る 輸出産業に飛行機を 技術育成自衛隊の役割は大きい / 盛田氏 “水空気 平和 いずれも高くつく” / 自衛隊支援の環境づくりを / “正論を取り上げて政治に反映” 江崎氏 / マイペースで走れ! 学歴無用実力主義のソニー / 世の中ごまかし通らぬ
1976年3月	鹿内信隆	サンケイ新聞会長	鹿内サンケイ新聞会長・江崎隊友会会長大いに語る / 中正な世論づくり 支持者増える “正論路線” / “ふるさと守り育てる市民組織を” 鹿内氏 / 防衛の根本 国民の国守る決意 / 推進しよう防衛意識の高揚 / “国際社会並みに自衛官優遇を” 江崎氏 / 社会的モラル回復へ 市民運動マスコミと政治が協力 / 若者を励ます社会機能を / 世の教育ママに聞かせたい話
1976年5月	春日野清隆	日本相撲協会理事	春日野親方(日本相撲協会理事) 大いに語る / “自衛隊は世間に遠慮しすぎる” 春日野理事長 / 備えあれば憂いなし 勝負に勝つ条件 “常在戦場” の訓練 / スイスの国防意欲に学べ / “国を守る勇者、自衛官の責任重大” 江崎会長 / 力士の体験入隊 深めよう相撲界と自衛隊の交流 / 次代を背負う青少年の体力鍛えよ
1976年6月	武見太郎	世界医師会会長 / 日本医師会会長	武見太郎氏(世界医師会会長 日本医師会会長) 大いに語る / 武見氏 “日本が人類平和のリーダーに” / 占領軍命令を拒否 日本人の人権を守る ケンカ太郎の面目躍如 / 自分の責任で考えよ 武見家の教育 / 防衛医大出身 “医療の国際交流で活躍を” 江崎氏 科学に目を向け 原子エネルギーの平和利用 / 使命感が生んだ勇気
1976年7月	朝比奈宗源	臨済宗円覚寺管長	朝比奈宗源老師(円覚寺派管長) 大いに語る / 朝比奈管長 “真に国を憂う気狂い出でよ” / 生きる姿勢が甘い しっかりしろ! 日本人諸君 / 国を守る強い信念 / “いまこそ百年の経 次代担う人づくりを” / 陛下に参った元帥 敗戦日本分割されずに生き残る / 外国人に魅力明治維新の活力
1976年8月	森繁久彌	俳優	名優森繁久彌氏大いに語る / 森繁久彌氏 “人間嫌しく生きよう” / 祖国なき民族の悲哀 観客に訴えるミュージカル “屋根の上…” / 自衛隊に親愛の情(森繁氏) / 国民迷途す野党(江崎氏) / “日本の若者たちを信じる” 江崎真澄氏 / 民族を愛する心アラーム発してゆり起こせ! / 若者よいい社会を創ろう
1976年9月	永野重雄	日本商工会議所会頭	永野重雄氏(日本商工会議所会頭) 大いに語る / “日本の子共を益にする” 永野氏 / 明るい国づくりを 日本 “曲った骨” を手術 / 恋無用、柔道一歩 若き日の永野さん / “親孝行運動を展開する” 江崎氏 / 日本の再出発若い活力生かせ 先輩は相談役で指導を / 道州制の打消さぬ / 防大卒に学士号を 総理、文相がその気になれば
1976年10月	團伊玖磨	音楽家	團伊玖磨氏(音楽家) 大いに語る / “自衛隊の音楽隊を援護射撃する” 團氏 / PR不足の自衛隊 もっと感謝されていい / 都民に名曲を 日比谷公園で演奏会を / 音楽隊は国営です 隊長は「将」にすべきだ / みんなで努力 “日本再発見の時代” 江崎氏 / 日本人の心、発掘 世界に輸出する音楽を / 名曲出でよ 地方作家に期待
1976年11月	入江相政	侍従長	入江相政侍従長大いに語る / 侍従ひとすじ 42年 / 陛下のお心づかいに感銘 / 国民の共感呼ぶ “侍従長の夢” / 日本の繁栄を願う 通じ合う陛下と国民の心 / 後世に残る貴重な随筆 / おおらかな心の陛下 生活に抑揚を どんぶり飯も召し上げる / 私は陛下を忘れない 英国大使の弁 / 愛すべき英国青年
1976年12月	高坂正堯	京都大学教授	高坂正堯(京大教授) 大いに語る / 高坂氏 “世界中が目している自衛隊” / 転換期に立つ日本 百の議論より実行の政治を / ミグ25事件 敵は徹底的に追え / “責任と勇気ある政治を邁進” 江崎氏 / 精強自衛隊が国守る 忘れるな連は力の哲学の信奉者 / 注視しよう来年の世界情勢
1977年1月	村松 剛	評論家 筑波大学教授	村松剛氏(評論家 筑波大学教授) 大いに語る / “教育とは文化遺産の継承です” 村松氏 / 政治に新しい展望を 日本人は保守党を見捨てない / カーター米大統領の横顔 / 混迷する国際情勢 次代に与える影響は大きい / 新時代に “即応する国際感覚を磨こう” 江崎氏 / のんきすぎるぞ日本 真剣にエネルギー開発を / 自衛隊よ耐えてくれ! / 海外に移動 武官の派遣
1977年2月	福田赳夫	内閣総理大臣	世を超え立場を超え助け合う人間の連帯を… / 福田首相・江崎会長大いに語る / 嵐の中の「日本丸」 協調と連帯で乗りきろう / 強力な景気政策を / 世界とともに生きる日本 / 日・米・西独 景気回復に協力 / 国民栄誉賞の新設 国民がこぞ功績称える人に / 36時間の予算閣議 / 軍部担当だった福田主計官 / 自衛隊員諸君 誇りをもって任務に励め! / 日米安保条約を堅持 隊友諸氏のご健闘を祈る
1977年3月	堀江正夫	隊友会理事 東京都総支部連合会長	江崎隊友会会長・堀江正夫氏と対談 / 防衛問題の専門家堀江さんに期待(江崎) / 私も全力あげて働く(堀江)
1977年7月	坂田道太	前防衛庁長官 社団法人全国自衛隊父兄会会長	全国自衛隊父兄会会長坂田道太氏 大いに語る / 政界に自衛隊専門家… / 結集する自衛官夫人 防衛問題関心高めるヤングたち / 長官のアドバイス役 安全保障と取組む政治家の層を厚くしよう / 200カイリ時代の対応策諸外国並みに / 殉職自衛官の慰霊塔建立を 野党支持者に自衛隊ファンも / 山ほどある安保課題 資源戦略いかに対応するか / 平和戦略研究所つくる / 人生のスタートに自衛隊は最高の人間練成道場
1977年8月	土光敏夫	経済団体連合会会長	土光さん大いに語る / 日本防衛まず国民の心から… / 景気対策「これが勝負!」の手打つ / “われわれも労働者ですよ” / ASEAN 諸国と協力 ソ連には二つの顔がある / 近代兵器の研究を スイスの心意気学べ
1977年9月	関牧翁	天龍寺管長	京都・天龍寺管長 関牧翁老師大いに語る / “男はロマンがなげりや… / 愛語よく回天の力あり / 誓約、女人に触れず 37歳まで以後は無茶苦茶ですワ…” / 若者よ心身を鍛えておけ 中国人の強い民族防衛意識
1977年10月	田辺茂一	紀伊国屋書店社長	紀伊国屋書店社長 田辺茂一氏大いに語る / 新宿を文化的な国際都市に… / 男の友情年齢差じゃないよ / 威張る奴はモテない / 底石は深く沈めて… / 国の礎 自衛隊よ頑張れ! / 人間の敵! ハイジャック 責任ある対策を
1977年11月	猪木正道	防衛大学校校長	防衛大学校校長 猪木正道氏大いに語る / 平和外交の要諦 敵は少なく味方を多く… / ウィンクしたソ連学者 / ムード政治は危険 / 日米関係たえず魂を吹きこめ / 日ソ善隣友好条約の検討を / 自衛隊を支援する民間組織を
1977年12月	宗道臣	総本山少林寺管長	総本山少林寺管長 宗道臣氏大いに語る / 自他共榮 愛民、愛郷の心を育てよう… / ただ今、弟子七十六万人 / 人生の哲理 / 半分は自分のために 半分は人のために… / ボヤボヤするな! 日本人 / まじめに働くものが損をしない社会を…
1978年1月	豊田英二	トヨタ自動車工業株式会社社長	トヨタ自動車工業株式会社社長 豊田英二氏大いに語る / 世界のトヨタを支える幹 自衛隊出身の社員たち / 創立以来約二千四百万台生産 / 「トヨタは借金なし」 / 会社と労組協力 苦難の道乗り越える / 若者よ未来を先取りしよう!
1978年2月	糸川英夫	組織工学研究所所長	組織工学研究所所長 糸川英夫氏大いに語る / 戦争の記憶をとどめる「平和記念館」を… / 英国のエリートに学べ / 米大統領選挙に出よ / 30年前の対談 尾崎氏のすずめにごっくろ / 地球には尻尾が生えている / ベトナム軍崩壊の原因
1978年3月	細川隆元	政治評論家	政治評論家 細川隆元氏大いに語る / 大衆は強力な政治を期待している / 政治のリーダー “経済心理学” を学べ / 注目の女性パワー “他山の石” フランスの総選挙 / 日中平和友好条約を結ぶときだ / 国際競争に遅れるな / 迎合政治を排せ ソ連の動向に注視を
1978年4月	牛場信彦	対外経済担当国務大臣	対外経済担当国務大臣 牛場信彦氏大いに語る / 制服同士の国際交流をひんばんに… / 米国に向かって言うべきは言う / 企業の海外進出 政府が支援協力を… 見習うべき EC の産業構造 / 権威ある平和問題研究所を 各国の人々と大いに語ろう
1978年5月	千 宗室	裏千家家元	裏千家家元 千宗室氏大いに語る / 日本精神健在! 鯉のぼりを上げる心意気 / 利休はたいへんな演出家 / 持て! 制服の誇りと自信 / 一服の茶を飲むゆとりも… / 若者よ自衛隊で鍛えよ!
1978年6月	森 英恵	服飾デザイナー	服飾デザイナー 森英恵さん大いに語る / 国と国が接近時代 地球が小さくなりました / ファッションは蝶みだい… / 女が強くなりました / 新しいもの美しいもの 生み出すために挑戦 / 日本男性に提案! 体格、体力づくりを…
1978年7月	日向方齊	関西経済連合会会長	関西経済連合会会長 日向方齊氏大いに語る / 若者よ! 社会のために汗を流そう / 防衛問題どしどし討議を! / 国民に事実を訴えよ 自ら守る努力なしに生き残れぬ / 愛国者こそ企業のリーダー
1978年8月	栗栖弘臣	前統合幕僚会議議長	前統合幕僚会議議長 栗栖弘臣氏大いに語る / 自分自身の防衛哲学を持て! / 有事立法検討へ政府・与党動き出す / 重要な国防の問題点 国民と共に考える必要を提起 / 「物事をごまかさぬ」私の人生観 / 日中条約締結後に二つの心配が…
1978年9月	阿川弘之	作家	作家 阿川弘之氏大いに語る / これからは情報戦の勝負 / 耳を長くすることに多額の金を… / 米内光政 山本五十六 正論持し 責務遂行 / 信念の人 吉田さん ユーモアと皮肉 元帥と GHQ 回答 / 中国人はお見通し 日本人の甘い性格を / 日空国鉄スビー競争
1978年10月	山田五十鈴	女優	女優 山田五十鈴さん大いに語る / 気分が入っている頼もしい自衛隊さん / 仕事に打ち込む男の姿は美しい / 思い出の中国ロケ / アンサンブルが大切 職場はまず和 金銭づくじない連帯感 / 新しい政治の幕を…
1978年11月	林 健太郎	日本育英会会長	日本育英会会長 林健太郎氏大いに語る / 国際社会に生きる日本民族の叡智を磨こう! / 日本人の欠点 バカ正直と悪乗り / 日中新時代幕あけ 新しい未来を開く出発点 / 日本の近代化に貢献した東大 対中国問題には対策を / 非常にいい天皇制 元号法制化は当然
1978年12月	柳家小さん	落語協会会長	落語協会会長 柳家小さん師匠大いに語る / いま世の中 日本人みんなが甘えている! / 客の心洗う弟子たち / 自衛隊よ強くなれ! 高座に上る時一ぺん一ぺんが真剣勝負 / 名人小さん一世一代の熱演 活気ある社会つくる

発行年月	対談者	肩書	見出し
1979年1月	園田直	外務大臣 日本空挺同志会会長	燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや/安保は日本が主人公 米中正常化の正しい運営を/「まじめ人間」に政治の手を/誇り高く生きよ! 新年スタート 自衛官諸君の健闘祈る
1979年2月	池田弥三郎	慶應義塾大学教授	江戸っ子教授大いに語る ゲスト池田弥三郎さん/海外に売り出せ! 日本人のユニークな才能を.../欲ばり精神が世の中を進歩させる/頭に残る文句が.../小さな親切運動 大きなお世話だ! 人間の平均点はほぼいっしょ/海の万葉旅行「日本海文化」の研究/若ノ花の敵は若ノ花 玉ノ富士 自衛隊魂で前へ!
1979年3月	山下元利	防衛庁長官	防衛庁長官 大いに語る ゲスト山下元利さん/いつも「第一線の心」を心として.../航空機購入 防衛庁に疑惑なし/文官・制服を問わず どしどし海外留学をさせよう/防衛計画の大綱 当面、変える必要なし
1979年4月	瀬島龍三	伊藤忠商事会長	今月のゲスト 瀬島龍三氏大いに語る/自由こそ人間にとって最大の幸せ/受刑者のほとんど ソ連の洗脳教育を拒否/佐官変じて左官に/日本を守る警戒衛生を上げよ!/安全保障三つの柱(軍事的防衛 エネルギー 大災害対策)/次代を担う人づくりを急げ
1979年5月	大島恵一	東大教授	今月のゲスト 大島恵一氏大いに語る/若い国際的な科学者の育成を.../スリーマイル島原子炉事故の教訓/原子力の開発利用官民ともに総力あげよう/欲しい国際的な政治力 各国は日本の発言無視できない
1979年6月	三船敏郎	映画俳優	今月のゲスト 映画俳優三船敏郎氏大いに語る/アラン・ドロンと男の約束 感銘与える映画をつくる/社員・家族の生活抱え責任の重さひしひし/わたしは日本人だ! 誇り高い国民意識を高めよう/見習うべきドイツ人の経済観念/国に愛着と誇りを...
1979年8月	土屋清	経済評論家	今月のゲスト 経済評論家土屋清氏大いに語る/日本の技術協力を期待する中東産油国/明治維新思わす国づくり/石油の海上輸送ルート守れ/大平首相の中東訪問を/予備自衛官を大事に
1979年11月	安西浩	東京都公安委員長 東京瓦斯会長	今月のゲスト 安西浩氏大いに語る/日本の警察官は優秀/幸福はわが健康にあり/考える時間をつくれ 日本の大臣は忙しすぎる/シベリア天然ガスの開発へ/子々孫々のために長期にわたるエネルギー対策
1980年2月	法眼晋作	国際協力事業団顧問 元外務省事務次官	今月のゲスト 法眼晋作氏大いに語る/アフガン侵攻 ソ連の自作自演/「全方位外交」は有り得ぬ/積極外交推進を 米国に言うべきは言え/工業技術世界一を維持せよ/官民あげて国防に開眼を!
1980年3月	マイク・マンズフィールド	駐日米国大使	駐日米国大使 マンズフィールド氏大いに語る/偉大なことが成しとげられる!/日米の友情永遠に 切っても切れぬ運命共同体/防衛問題 日本独自の責任で決まよ/日米がスクラム組めば/人間はみんな同じ 日本人よ日本人であり続けよ/「五輪」には期待持たぬ
1980年6月	フランシスコ・パビエル・アレホ	駐日メキシコ大使	駐日メキシコ大使 アレホ氏大いに語る/「日本・メキシコ新時代」幕あけ!/アミーゴ江崎さん/「名誉」を重んずる大統領/胃袋大きくしたい 国づくりに日本の協力を.../勤勉こそ日本の資源 日本の若者へ 諸先輩の努力忘れるな
1980年7月	ゲネス・マイケル・ウィルフォード	駐日英国大使	駐日英国大使ウィルフォード氏大いに語る/日本に愛情をいっぱい感じている/深まる日英協力体制 経済協力 江崎さんはよき相談相手/日本の企業進出を大歓迎/日英海軍向う方向は同じだ! 緊張の度深める欧州の軍事情勢/「日本」を知らない日本人/高まる日本文化への関心
1980年8月	矢次一夫	国策研究会代表常務理事	国策研究会代表常務理事 矢次一夫氏大いに語る/アジアには三つのチャイナがある/目は笑わぬ中国首脳/中ソ八百長あり得ぬ/中国台湾恋愛結婚せよ! 地縁・血縁つながる同民族/興味深い合弁事業 中国の近代化 まず農地改革から/若者に奉仕の精神を/アジアの同意的連帯進めよ!
1980年10月	ギュンター・ディール	駐日ドイツ連邦共和国大使	駐日ドイツ連邦共和国大使 ギュンター・ディール氏大いに語る/世界各国が期待よめる日独の緊密な協力とリード/日本の近代化指導したドイツ/もっと政治関係を深めよう/隊友会の任務は重い/奥野発言は当然だ 自国の主権自らの手で守る/伝統的な相互尊敬は不変/欧州に日本文化を!
1980年12月	三宅重光	東海銀行会長 中部自衛隊協力会会長 日本近代五種バياスロン連合後援会理事	三宅重光氏大いに語る 名古屋オリンピック実現へ/大へんだった根回し/中国も名古屋開催を支援/手強い名古屋商法 海外へPRのチャンス到来/新機軸の大会開く 内外から350万人のお客さん/成否にぎる自衛隊の支援
1981年3月	大山康晴	十五世名人・日本将棋連盟会長	十五世名人・日本将棋連盟会長 大山康晴氏大いに語る/明日ありと思うな 燃ゆる闘魂 一局一局真剣勝負/自戒! 天狗になるな/若者に体験入隊を 男の生活ビタぐらいあていい/闘魂
1981年4月	ブルース・ランキン	駐日カナダ大使	駐日カナダ大使 ブルース・ランキン氏大いに語る/一寸先は闇! 激動する国際情勢 自主性を貫くカナダ外交/「軍隊と苦役」論議は不可解/注目のオタワ・サミット 日加協力、新時代の幕あけ/日本の大学生 もっと勉強しなさい!
1981年5月	小島孝治	全日本女子バレーボール監督	全日本女子バレーボール監督 小島孝治氏大いに語る/日本一のムコさがし「鬼の大松」佐藤首相に申し入れ/ソ連やキューバ勝つために英才教育/教育に情熱を持って! マネリ化が校内暴力招く/米軍人が批判 エゴイスト日本
1981年8月	木村篤太郎	隊友会名誉会長	隊友会名誉会長 木村篤太郎氏大いに語る/厳戒せよ ソ連の動きを オタワ・サミットを評価/占領軍命令の押し付け憲法/もっと国民にPRを/いのちかけたい破防法の成立 女房が骨を拾うだろう/国家あつての憲法だ/隊友はみんな兄弟分だ/生死は天にあり なんでもどーんとき
1981年11月	山口淑子	参議院議員	参議院議員 山口淑子さん大いに語る/中東和平に向けて 日本が政治的役割果たす時/イラク首脳に助言 戦争を早くやめよ/八項目和平提案評価 人づくりに励む「流浪の民」/若者よ肌で知れ 戦争とは? 平和とは?
1982年4月	天谷直弘	経済評論家	ゲスト 経済評論家 天谷直弘氏 欧米特使から帰って/お釈迦さま(米国)に手助けを/レーガン氏に要望 中国問題処理は慎重に/欧米の不況続けば.../日本は自由世界の防衛に責任を持つ
1982年9月	矢野暢	京都大学教授	ゲスト 矢野暢京大教授/東南アジアは、わが友、わが仲間!/人や文化の交流を! ジャングルの中で研究生活/LOOK EAST 誠意で応えよう/LOOK ASEAN シンガポール次代教育に陽明学採用/日本人とは何か 問題を洗いおせ
1982年11月	中曽根康弘	行政管理庁長官 元防衛庁長官	行政管理庁長官 元防衛庁長官 中曽根康弘氏大いに語る/防衛議論を国民の広場に.../行政改革強く推進 盛況! 中曽根総裁実現決起大会/自衛隊OBを活かす/防衛庁の出向者を首相秘書官に配置 民間防衛隊友が中核に/新分野ヘスクラム
1983年4月	三鬼陽之助	経済記者	財界の指南役・日本一の経済記者 三鬼陽之助氏大いに語る/自衛隊への注文 軍律きびしく「常在戦場」で精励を!/第二の開国時代来る 経済摩擦みんなが背負う十字架/若き日の江崎会長 吉田首相の秘書官に/怪文書は熟読せよ 栄誉を辞退した気骨の人/注視せよ! SS20 極東配備/三鬼さんの横顔/日本は軍事大国にならぬ! 21世紀はアジアの時代 江崎会長 ASEAN記者団に強調
1983年7月	丹下健三	建築家	文化勲章受章者 日本が世界に誇る建築家 丹下健三氏大いに語る/原爆犠牲者慰霊碑設計 平和の祈りこめて すべての国の人に自覚を/魅かれた京都御所 都市空間へ関心深める/田中角栄蔵相の一言/国鉄再建に妙案あり 海外で好評! 「ダイナミックな江崎氏」/ルック! シンガポール
1983年9月	花村仁八郎	日本航空会長・経団連副会長	日本航空会長・経団連副会長 花村仁八郎氏大いに語る/日本の繁栄を築いた自民党長期政権/不死鳥日本を信ず 敗戦後の幾山河を越えた底力/温室から出よ 国際競争力を養え! 最重要な日米関係 不当な米国高金利政策/経団連に安保問題研究会を
1983年10月	福田信之	筑波大学長	筑波大学長・理学博士 福田信之氏大いに語る/日米協力のシンクタンクをつくれ/条約を平気で破るソ連/ソ連侵攻が生んだ「中国孤児」/筑波大の誕生 田中角栄首相の決断で/筑波は東のジュネーブ 科学技術を背景に 国際協力のメッカに/若者よ知れ! 自由の尊さを
1983年11月	杉本苑子	作家	直木賞作家 杉本苑子さん大いに語る/平和共存へ! 人類の英知を結集せよ/政治も芝居も脳役次第 レーガン米大統領に「宮本武蔵」英訳本送る/名作の舞台、わが選挙区「孤愁の岸」にほれた森繁 忘れ得ぬ伊勢湾台風/防衛問題 国民に解るPRを現状でいいのかわらないか/一番怖い 宗教・イデオロギー対立
1986年1月	徳川義寛	新侍従長	天皇陛下ご在位60年奉祝 新春対談/人と人 国と国 交流、協調深めて平和共存を!/ご即位以来 平和祈り続ける陛下 国民と音楽を共に歩む/命かけて守り抜く 天皇陛下の玉音放送録音盤/激動の国際情勢 おくわしい陛下 ご仁徳に敬服したマ元帥/日本独自の平和哲学を!
1987年1月	角川春樹	角川書店社長	新春対談 「日本の心」を語る/魂を引揚げるのだ 艦魂「大和」の鎮魂・探索作業/桜と日本人 桜吹雪待った西行法師 俳句は日本の最も優れた文芸/受験戦争をやめよ

(注1) 見出しが複数ある場合、(/) で分けている。

(注2) 肩書は記事中のものを原文のまま掲載した。全て掲載当時のものである。

(注3) 1977年3月付の堀江正夫との対談は記事中に「希望対談」とは書かれていないが、形式の類似性から「希望対談」に準じるものとして一覧に入れた。

出典: 「希望対談」続希望対談 「新春対談」 「隊友」1976年1月付~1987年1月付から筆者作成

表2 1959年8月から1980年3月までの『隊友』に掲載された座談会一覧

発行年月	面	参加者(肩書、もしくは階級)	見出し
1959年11月	2	部隊5名(士2名、曹3名)、募集班1名(尉1名)、司会1名	座談会/隊友は厳正中立/「隊友」を読みたい/現職は賛助会員に/隊友会の事業は
1959年12月	2	部隊4名(尉2名、佐2名)、広報(佐1名)、司会1名	隊友会にのぞむ/捨て金はイヤだ!! 活かして使ってくれ/PRが足りない/天引きする・左様心得よ ソレデハ困る/政治にはかかわるな/退職者は年間260名/われわれの新聞
1960年1月	2	部隊9名(士3名、曹3名、佐1名、事務官1名、書記1名)、司会1名	隊友会にのぞむ/見返りがほしい 部隊パンフレットを/昔の在郷軍人会との違いは?/停年は幹部ばかりでないよ・身近な問題に沸く/賛助会員である部隊職員として一言/賛助会費は要するに寄附です
1960年11月	2	部隊5名(士1名、曹2名、尉2名)、広報班1名(曹1名)	座談会 隊友会はオレたちの会 海田市部隊/育成のため 今のところ文句ばかり
1961年2月	3	地連1名(部長1名)、隊友会3名	隊友会の今後について 岡山支部で座談会/希望に満ちた前途 考えたい退職者の就職
1961年7月	4	地連2名(部長1名、課長1名)、隊友会4名(地方4名)、司会1名	座談会 会勢拡充の構想を聞く 千葉支部を訪ねて/会員は誇りを持つ 隊友会は精神的なもの
1962年3月	5	地連3名(部長1名、副部長1名、課長1名)、隊友会6名(地方6名)、司会1名	座談会 こうして会員を増やした/聞き手・静岡支部 語り手・千葉支部/社会的に発言力のある団体に成長しよう 栄冠の陰に努力はつづく
1962年4月	5	地連2名(副部長1名、曹1名)、隊友会3名(本部1名、地方2名)	社会的に認知される方向へー東海三県の支部長に聴くー 愛知/地連内に事務局を 施策には愛情がほしい
1962年4月	5	地連3名(部長1名、課長1名、曹1名)、隊友会11名(地方11名)	社会的に認知される方向へー東海三県の支部長に聴くー 静岡/やりたい公共事業 在隊間から入隊教育を望む
1962年4月	5	部隊1名(職員1名)、地連2名(副部長1名、佐1名)、隊友会2名(地方2名)	社会的に認知される方向へー東海三県の支部長に聴くー 岐阜/飛騨部会を横断に引き続き地連の協力願う
1962年5月	5	地連2名(部長1名、課長1名)、隊友会3名(本部1名、地方2名)	社会的地位の確保へ 関東三県の支部長と役員に聞く 栃木/明るく高度なアイデア 穏健妥当な事業計画
1962年5月	5	地連3名(副部長1名、課長1名、隊友会担当1名)、隊友会1名(地方1名)	社会的地位の確保へ 関東三県の支部長と役員に聞く 埼玉/のび悩みを踏み越え 部会結成から再出発
1962年5月	5	地連3名(部長1名、副部長1名、課長1名)、隊友会3名(地方3名)	社会的地位の確保へ 関東三県の支部長と役員に聞く 群馬/モデル部会を重点的に 組織の確立と行事の実施
1962年6月	5	地連1名(課長1名)、隊友会8名(地方8名)	茨城/会員増勢とPRを併行 職場部会にも力を注ぐ
1962年7月	5	源田実(本会副会長 前航空幕僚長)、庵原貢(同 前海上幕僚長)、杉田一次(同 前陸上幕僚長)	宇宙時代は既に到来している/隊員に精神的処遇を 自衛隊教育を認識せよ/五年以内に大気圏外の割当 星の世界に移民実現/参院当選に期待する 男らしい社会をつくれ
1962年8月	5	地連3名(部長1名、課長1名、隊友会事務担当1名)、隊友会5名(本部1名、地方4名)	防衛基盤の育成 南九州の支部にきく/熊本/あり難い部会の協力 正会員の終身会員制を望む
1962年8月	5	地連4名(副部長1名、課長1名、係長1名、隊友会担当1名)、隊友会5名(地方5名)	防衛基盤の育成 南九州の支部にきく/大分/地連が支援に力を一防衛講演会や無医村診断など
1962年9月	5	地連4名(部長1名、副部長1名、係長1名、隊友会担当1名)、隊友会4名(地方4名)	防衛基盤の育成 南九州の支部にきく/宮崎/モデル支部指定を望む 在隊間の教育をしっかりと
1962年9月	5	部隊5名(佐4名、尉1名)	防衛基盤の育成 南九州の支部にきく/鹿児島/終身会員制と就職斡せんを優先的に 賛助会員への見返り品はいらない
1962年9月	5	地連5名(部長1名、副部長1名、総務部長1名、隊友会事務担当1名、募集係1名)、隊友会6名(地方6名)	防衛基盤の育成 南九州の支部にきく/鹿児島/国家的育成の方向へ 地方自治体などと協力し
1962年10月	5	市長1名、自治体3名、地連2名(部長1名、課長1名)、部隊2名(佐2名)、隊友会2名(地方2名)	防衛基盤の育成—日司令の吉原市長とともに/静岡支部/よくやっているな 自衛隊を祖木にするのはよくない/崩れない団結の基礎を 若い隊員は羨ましい/板妻駐屯地と第三十四普連
1962年11月	4	地連4名(部長1名、課長1名、部員2名)、隊友会16名(本部1名、地方15名)	我が支部のねらい 四国四県を訪ねて/徳島/筋金入り揃い 四国の雄 地連との意思疎通満点
1962年11月	4	地連4名(部長1名、副部長1名、課長1名、隊友会担当1名)、隊友会3名(地方3名)	我が支部のねらい 四国四県を訪ねて/高知/少数といえども精鋭 県細胞・堅実に固める
1962年11月	4	地連4名(部長1名、副部長1名、課長1名、隊友会担当1名)、隊友会5名(地方5名)	我が支部のねらい 四国四県を訪ねて/香川/地連のジープ隊で 会員増勢個別勧誘
1962年11月	5	地連4名(部長1名、課長1名、隊友会担当2名)、隊友会3名(地方3名)	我が支部のねらい 四国四県を訪ねて/愛媛/無視できぬ地方勢力 将来が楽しみ的心情
1962年12月	5	職場1名(取締役1名)、隊友会職域支部(係長2名、従業員5名)、司会1名(佐)、テープレコード1名(曹)	第一線で活躍する除隊社員 東京・野口建設部会座談会/正面からばかりでなく考えて責務をやりとげる/欲のないころの団結がなつかしい/身体を使うことは何んとも思わない/人間関係の複雑さはつきりえないこともある/体力の限界を即断するな/会社をより立ててゆく心構え/艱難に耐え泰然と/社会にはすごい人がいる 誠実努力忍耐で行こう
1963年1月	3	地連3名(課長2名、隊友会担当1名)、隊友会1名(本部1名)	支部の現状と将来 近畿の巻(その一)/大阪/分派的行動やめよ 社会に打出す線は一本
1963年1月	3	地連2名(副部長1名、隊友会担当1名)、隊友会4名(地方4名)	支部の現状と将来 近畿の巻(その一)/三重/苦勞する育成への導入/期待される小田新支部長の手腕
1963年1月	3	地連2名(部長1名、係長1名)、隊友会6名(地方6名)	支部の現状と将来 近畿の巻(その一)/滋賀/ガメツイ県民性と腕押しはつまぐ
1963年2月	5	地連3名(部長1名、副部長1名、隊友会担当1名)、隊友会7名(地方7名)	支部の現状と将来 近畿の巻(その二)/和歌山/補助金の導入を望む うれしい県当局の力添え
1963年2月	5	地連(課長1名、隊友会担当1名)、隊友会4名(地方4名)	支部の現状と将来 近畿の巻(その二)/奈良/着実に組織化せらう 桜井部会 先行の火をとます
1963年2月	5	地連(副部長1名、課長1名、隊友会担当1名)、隊友会1名(地方1名)	支部の現状と将来 近畿の巻(その二)/兵庫/職場部会を重点に一県内の一大勢力めざす
1963年2月	6	地連4名(部長1名、副部長1名、前隊友会担当1名、現隊友会担当1名)、隊友会1名(地方1名)	支部の現状と将来 近畿の巻(その二)/京都/種蒔き、地固めに努力 やらねばならぬ、これからだ
1963年3月	5	地連1名(副部長1名)、隊友会6名(地方6名)	最近の活動状況と将来の方向 北陸三県の支部に聴く/富山/部会の強化拡充 今夏、音楽隊の大演奏会
1963年3月	5	地連2名(部長1名、副部長1名)、隊友会8名(本部1名、地方7名)	最近の活動状況と将来の方向 北陸三県の支部に聴く/石川/制服のデザイン示せ 部隊見学を市町村に浸透させる
1963年4月	5	退職者8名、一陸佐11名、二陸佐10名、運営5名(業務学校長 将補1名、二佐4名)	自衛官らしく裸で飛び込もう 上級幹部と先輩の座談会=業務学校にて=列兵から再出発 単刀直入はつしめ/笑顔と平易な言葉で 給料の"たか望み"は弊害/共通の話題と広場を/いかに役立つかが基本 優秀者はスカウトされる/すべて聖徳太子に 誠心誠意苦業を共に/クラブ活動から入る職場のつながりも大切
1963年6月	5	木村篤太郎(会長)、杉田一次(副会長)、筒井竹雄(相談役)、杉山茂(同)、中野敏夫(常務理事)、井本熊男(理事)、福地誠夫(同)、金原節三(同)、金山国治(参与)、岸本重一(同)、伊藤邦彦(参与)、吉田英三(同)、浜口泰磨(同)、松谷誠(同)、辻村義知(同)、秋山紋次郎(同)、新宮陽太(同)、池上巖(同)、江上侃(事務局)、泉茂(同)	参与会の発言から/増勢運動を展開 共通広場で提携しつつ/部会長の任務を明確に 末端の活動技術を学ぼう/自力論と福祉問題/"戦争はいやだ"の国民感情をいかにほごすか
1963年7月	5	大日工業株式会社25名(社長1名、専務取締役1名、元将官1名、元佐官8名、元尉官2名、元曹5名、元技官4名、他3名)、東京地連5名(部長1名、副部長1名、課長2名、班長1名)、陸幕第一部1名、隊友会1名	職場紹介 自衛隊出身者の事業経営 意見録音 大日工業株式会社/13人のサムライから出発 根性と拙速がモットー/原価意識のセンスと体力がものをいう/企業は独創的芸術 一にも二にもファイト

発行年月	面	参加者(肩書、もしくは階級)	見出し
1963年7月	6	地連2名(課長1名、係長1名)、東北方面隊1名(募集課1名)、隊友会8名(地方8名)	宮城/成長期への動き/隊友会の趣旨徹底と名前を連ねる意義/社会全体の目標に 営利事業はできない/今後の退職者を重点に 将来を夢みて励もう
1963年11月	4	日立運輸9名(隊友会員8名、勤務課長1名)	“日立運輸”隊友の座談会 職場だより/珠磨かざれば光なし 予備自衛官志願もすすめる
1964年1月	5	地連5名(部長1名、課長1名、隊友会担当者3名)、隊友会5名(地方5名)	エンジンがかかったら・すごいで!! 東北・北部三県の会活動/岩手/嫌われない会勢拡張 除隊時の入会を望みたい
1964年1月	5	地連4名(部長1名、副部長1名、課長1名、隊友会担当1名)、隊友会2名(地方2名)	エンジンがかかったら・すごいで!! 東北・北部三県の会活動/青森/後進県の汚名を捨て 協力ムードを
1964年1月	5	地連5名(部長1名、課長1名、事務官2名、自衛官1名)、東北方面募集課1名、隊友会9名(地方9名)	エンジンがかかったら・すごいで!! 東北・北部三県の会活動/秋田/基礎固めから出発し 長い目で根強く
1964年3月	6	地連1名(副部長1名)、隊友会4名(地方4名)	うれしいこと むつかしいこと 中国五県に聞く/山口/スローでも手堅く 有難い地連の全面支援
1964年3月	6	地連1名(部長1名)、隊友会1名(地方1名)	うれしいこと むつかしいこと 中国五県に聞く/岡山/まず会員増勢一本槍 風雪の中を固い人の集り
1964年3月	6	地連2名(部長1名、課長1名)、隊友会4名(地方4名)	うれしいこと むつかしいこと 中国五県に聞く/広島/原爆の街に成長の芽 むつかしい県内への浸透
1964年3月	7	地連2名(部長1名、隊友会担当1名)、隊友会3名(地方3名)	うれしいこと むつかしいこと 中国五県に聞く/島根/地道にコツコツと 県民性ととの相撲だから
1964年3月	7	地連3名(副部長1名、協力団体担当1名、予備自衛官担当1名)	うれしいこと むつかしいこと 中国五県に聞く/鳥取/支援したいが 募集苦境で未だ手が出ず
1965年1月	5	地連4名(部長1名、副部長1名、課長1名、隊友会係1名)、隊友会4名(地方4名)	山梨/「善意」の連鎖反応 山陰や盆地に咲く美談/部外工事の仲介人と隊員慰問
1965年1月	5	地連2名(副部長1名、部員1名)、十三普通4名(連長1名、副連長1名、業務隊長1名、隊友会係1名)、隊友会7名(地方7名)	長野/部隊と県民を結ぶ 美しい隠れた善行の数々
1965年1月	5	地連4名(部長1名、課長1名、広報班長1名、隊友会係1名)、県1名(地方課1名)、隊友会5名(地方5名)	新潟/毎年でも開催したい 実った地連関係者の努力
1965年8月	1	匿名(本部、各支部連合会、東京の一隊友)	“参院選”を顧みて 隊友座談会/“組織と将来性”反省すべきか?か?か?
1966年1月	5	隊友会4名(本部4名)、企業6名	各社の人事担当者にきく 退職隊員に望むもの/技術はいりません 品行良ければ無条件採用/大切な“しつけ”協調できる人がほしい
1967年1月	3	隊友会4名(本部3名、地方1名)、企業5名	隊友をめぐるよもやまばなし/座談会/内部を固めること 外に對し、もっとPRを/会員にチャンス与え精神的誇りをもたせたい/国旗を売り出しますか
1967年3月	1	隊友会6名(東京4名、広島1名、山形1名)	隊友の見た選挙と政治/座談会/選挙区地盤不足に/戦訓を生かそう/地方選挙で団結を期せ/積み重ねが必要だ/政治に対する教育/隊友個々の自尊心/選挙も一つの戦術
1968年1月	3	防衛庁2名(広報課長、人事局人事第二課長)、隊友会4名(本部4名)	隊友会の未来を占う新春座談会/協力団体の中心に/隊友会館の設立準備の開始を期待/大いに自覚を持とう
1968年7月	2	匿名	隊友会と政治/座談会/隊友は人材多し/防衛政治家を国会へ送れ
1968年12月	3	匿名	全学連の防衛庁襲撃/座談会/“断固やっつけろ” “いや、警察の力で十分”
1969年1月	7	並木一(漫談家)、白山雅一(声帯模写)、宝とも子(ラテン歌手)、古今登しん駒(落語家)、林家三平(落語家)、小野つよし(漫画と司会)	芸能人、よもやま放談/大いに語る芸能人/隊員さんの喜ぶ顔 自衛隊はいちばんやり易い/将校はもつと権威を
1969年4月	4	防衛庁1名(人事二課部員)、自衛隊3名(尉1名、曹1名、広報班事務官1名)、隊友会5名(本部2名、地方3名)	座談会/隊友からの要望と現職の期待するもの/現職の曹士クラスは“隊友会”を知らぬ/機関紙の配布を徹底せよ/今後の発展を期待/“活動家”をさがせ/将/佐官も予備自衛官に
1969年10月	3	隊友会18名(地方17名、司会1名)	中央研修会を終わって/活発に討議を展開/組織強化のキメ手/最寄り部隊と緊密に 除隊者名簿の提出望む/同好グループから部会へ/隊友会の魅力化 精神的つながりで/予備自衛官に立派な制服を/牛乳販売して会の財政に/除隊式はもつと厳粛盛大に
1969年11月	3	隊友会48名(地方47名、司会1名)	中央研修会を終わって(第二回)/1班と3班の討議概要/まず隊友自らの意識高揚因れ/70年安保に對処する道/組織化と連絡/財政の問題/隊友会のあり方について/隊友の全国大会望む/会費徴収訓練招集時に/会組織の在り方/財政問題について/機関紙問題について
1970年1月	3	自衛隊4名(自衛隊中央病院看護部2名、朝霞婦人自衛官教育隊2名)、隊友夫人2名、渡辺はま子(司会、歌手)	婦人自衛官と隊友夫人を囲んで/新春座談会/うらやましい生活 防衛意識は環境から/入隊の動機について/制服で銀ブラも 若い女性は一休体験を/女性の立場からみて/男性観について/後輩に對する希望
1971年3月	4	隊友会18名(地方16名、職場1名、司会1名)	東京隊友ズバリ放談/三島事件を批判 やはり暴力は許せない/三島氏は狂気か天才か/隊友会成長が楽しみ 頼母しかった祝賀行進(原文ママ)/自ら実践すること 国土防衛は家族愛から
1971年4月	8	自衛隊出身社員3名(課長1名、課長補佐2名)、社員1名(司会)	【広告】私はこの企業を選びました………未来を築くアメリカナ/紙上座談会—自衛隊出身者にきく—
1972年1月	2	隊友会5名(地方4名、司会1名)	活動家隊友に方策と展望をきく/新春座談会/大衆に目を向けよ/隊友活動 強い音頭取りが必要/除隊者の信頼と強い指導力/各支部は除隊者の窓口に/反戦運動と隊友 現憲法と教育が問題/理解されない反戦の意味/若い隊員に理論武装が必要/いまの教育に欠けている面/誤解される軍国主義
1972年11月	3	予備自衛官10名、20普通連の任期制隊員35名	予備自衛官だより/東北方面隊で処遇改善 ほう賞制度を拡充 予備自衛官の誠意にこたえる/予備自衛官大いに語る 任期制隊員との懇談
1973年3月	13	匿名	放談会 釣あれこれ/未潮黒土で釣れ
1974年11月	6	予備自衛官5名(准尉4名、曹1名)、予備自衛官配偶者(人数不明)、防衛庁(人事二課長1名、人事二課員1名)、陸幕一部1名(副部長1名)、隊友会1名(本部事務局長)	予備自衛官大いに語る 座談会/池田内局人事二課長らも出席/予備自衛官に誇り/募集協力まず「我が子入隊」の心構え/お客さん扱い/いそいそと訓練に/若い人とよく話す/わが子を自衛官に/入隊が縁結び/幹部昇進策は?/訓練時に社会情勢も/隊友会への意見/行動する隊友会に
1975年11月	4	永年勤務の予備自衛官代表5名(一曹5名)、夫人5名、防衛庁2名(人事二課長1名、人事二課員1名)、陸幕一部3名(部長1名、副部長1名、予備自衛官室長1名)、隊友会1名(本部事務局長1名)	たいへん参考になりました/予備自衛官・内局・陸幕・隊友会が懇談/訓練の魅力化を……/召集前に健康管理/奥さん感心 だんな様の自衛隊精神/被服の払い下げを/皆でチエを集めて/人事制度調査委で/訓練前は断酒/規律と自由の区別/市民に親近感を/隊友会への注文
1976年9月	5	東京都総支部連合会10名(会長1名、会員9名)	行動する隊友会へ/堀江会長と若い活動家膝を交えて懇談<都総連>
1978年7月	1	隊友会10名(地方10名)	東京で働いている仲間たちの生活と意見/都総連・城東地区連合会の人たち
1978年8月	4	隊友会8名(地方8名)	東京で働いている仲間たちの生活と意見
1980年1月	1,2	隊友会6名(会長1名、東京都支部連合会長1名、神奈川県支部連合会長1名、山梨県支部連合会長1名、本部事務局長1名、常務理事1名)	隊友こそ80年代の国づくりの中核/江崎真澄会長を囲んで新春座談会/決意新たに前進!隊友諸氏の健闘を祈る/東京都連の現況/ヨーロッパ研修/国際交流深めよ/神奈川県連の近況/会員の心つなぐ新聞/国際機関に参加協力/創立20年を機に民間防衛検討へ/募集業務はOBで/民間防災と取決め/足もとの見直し/若者の燃える気持/リーダーシップ/予備自衛官激励に/隊友会に階級はない/国会に防衛委員会を/ブロック会議に出席/隊友会のPRを強化/現職にアンケート/積極的に収益事業を/特別会員をふやせ/隊友会の役割ますます重大/江崎会長を中心に/エピソード/森嶋発言の波紋/戦中派の叫び

(注1) 見出しが複数ある場合、(／)で分けている。広告欄の場合は【広告】と記載している。
 (注2) 隊友会本部役員を「本部」、都道府県連合会、支部、部会等の地方組織所属の場合は「地方」と表記した。地方連絡部を「地連」と省略している。
 (注3) 隊友会本部役員のみ座談会及び芸能人の座談会参加者以外は氏名を省略している。
 (注4) 肩書は全て掲載当時のものである。
 出典:『隊友』1959年8月付～1980年3月付より筆者作成

表3 1959年7月から1980年3月までの『自衛』『隊友』内広告掲載数

発行年月	宣伝	求人	その他	発行年月	宣伝	求人	その他	発行年月	宣伝	求人	その他	発行年月	宣伝	求人	その他
1959年7月	2			1965年8月	6			1971年9月	7	16		1977年10月	3	1	
1959年8月	2			1965年9月	8			1971年10月	6	19		1977年11月	6	1	
1959年9月	2			1965年10月	7	1		1971年11月	6	18	6	1977年12月	5	1	
1959年10月	2			1965年11月	8			1971年12月	5	20		1978年1月	6	1	125
1959年11月	1			1965年12月	7			1972年1月	18	14	59	1978年2月	4	2	2
1959年12月	2			1966年1月	9	2	21	1972年2月	4	19	12	1978年3月	7	1	
1960年1月	2			1966年2月	7	1		1972年3月	10	14		1978年4月	4	1	
1960年2月	2			1966年3月	6			1972年4月				1978年5月	6	1	
1960年3月	1			1966年4月	8			1972年5月	9	8		1978年6月	3	3	
1960年4月	1			1966年5月	6	2		1972年6月	6	10		1978年7月	4	2	61
1960年5月	1			1966年6月	8			1972年7月	7	13	16	1978年8月	4	1	12
1960年6月	1			1966年7月	10	1		1972年8月	8	7		1978年9月	2	2	
1960年7月	1			1966年8月	8	1		1972年9月	7	10		1978年10月	8	1	
1960年8月	1			1966年9月	8			1972年10月	6	28		1978年11月	5	1	
1960年9月	1			1966年10月	5	1		1972年11月	4	44		1978年12月	5	1	
1960年10月	1			1966年11月	7	1		1972年12月	6	56		1979年1月	3	1	182
1960年11月	1			1966年12月	5	4		1973年1月	10	45	69	1979年2月	6	1	3
1960年12月	1			1967年1月	12	5	19	1973年2月	7	62		1979年3月	5	1	
1961年1月	1			1967年2月	7	2		1973年3月	7	61		1979年4月	3	1	
1961年2月	1			1967年3月	8	4		1973年4月	11	52		1979年5月	5	1	
1961年3月	1			1967年4月	5	6		1973年5月	5	55		1979年6月	7	1	
1961年4月	3			1967年5月	6	4		1973年6月	5	58		1979年7月	5	2	156
1961年5月	8			1967年6月	7	9		1973年7月	2	55	27	1979年8月	7	2	17
1961年6月	8			1967年7月	5	5		1973年8月	6	59		1979年9月	9	3	
1961年7月	9			1967年8月	6	9	4	1973年9月	10	52		1979年10月	6	4	
1961年8月	5	1		1967年9月	5	10		1973年10月	7	43		1979年11月	9	2	
1961年9月	10			1967年10月	8	9		1973年11月	8	49		1979年12月	6	2	
1961年10月	10	1		1967年11月	9	10		1973年12月	5	52		1980年1月	3	3	197
1961年11月	9	1		1967年12月	6	9		1974年1月	7	36	13	1980年2月	7	3	
1961年12月	11	1		1968年1月	12	9	31	1974年2月	8	42		1980年3月	6	9	
1962年1月	9			1968年2月	9	9	2	1974年3月	6	46					
1962年2月	6			1968年3月	8	8		1974年4月	8	43					
1962年3月	7			1968年4月	6	10		1974年5月	14	47					
1962年4月	5	1		1968年5月	7	9		1974年6月	8	38					
1962年5月	3	1		1968年6月	9	9		1974年7月	8	39					
1962年6月	1			1968年7月	8	15		1974年8月	9	31					
1962年7月	1			1968年8月	5	15	3	1974年9月	16	30					
1962年8月	2	1		1968年9月	4	19		1974年10月	8	43					
1962年9月	1			1968年10月	4	19		1974年11月	10	42					
1962年10月	1	1		1968年11月	4	16		1974年12月	17	20					
1962年11月	1			1968年12月	5	18		1975年1月	19	17	11				
1962年12月	1			1969年1月	7	21	23	1975年2月	25	12					
1963年1月	2			1969年2月	3	21		1975年3月	20	13					
1963年2月	2	1		1969年3月	3	20		1975年4月	21	11					
1963年3月	1			1969年4月	2	30		1975年5月	10	1					
1963年4月	1			1969年5月	1	29		1975年6月	8	1					
1963年5月	2	1		1969年6月	1	25		1975年7月	6	1					
1963年6月	2			1969年7月	1	27		1975年8月	5	2	1				
1963年7月	1	1		1969年8月	1	29	1	1975年9月	6	1					
1963年8月	2			1969年9月		32		1975年10月	6	1					
1963年9月	1			1969年10月	1	31		1975年11月	8	1					
1963年10月	2	1		1969年11月	1	32		1975年12月	4	1					
1963年11月	1			1969年12月	3	33	12	1976年1月	5	1	9				
1963年12月	1			1970年1月	6	41	24	1976年2月	4	1					
1964年1月	1			1970年2月	2	21		1976年3月	7	1					
1964年2月	1			1970年3月	1	26		1976年4月							
1964年3月	1			1970年4月		28		1976年5月	9	1					
1964年4月	1			1970年5月		28		1976年6月	37	1					
1964年5月	1			1970年6月	1	33		1976年7月	6	1					
1964年6月	1			1970年7月		43		1976年8月	6	2					
1964年7月	2	2		1970年8月	3	41		1976年9月	5	1					
1964年8月	2	1		1970年9月	3	33		1976年10月	7	1					
1964年9月	4			1970年10月	4	27		1976年11月	5	1					
1964年10月	5	1	1	1970年11月	3	27	60	1976年12月	6	1					
1964年11月	7			1970年12月	2	39		1977年1月	5	1	94				
1964年12月	8			1971年1月	3	39	33	1977年2月	5	1					
1965年1月	9		3	1971年2月	1	32	1	1977年3月	4	1					
1965年2月	6	1		1971年3月	3	42		1977年4月	4	1					
1965年3月	5			1971年4月	2	28		1977年5月	7	1					
1965年4月	5			1971年5月	3	21		1977年6月							
1965年5月	5			1971年6月	7	17		1977年7月	4	1	21				
1965年6月	7			1971年7月	4	19		1977年8月	6	1	14				
1965年7月	6			1971年8月	9	16	4	1977年9月	4	2					

(注1) その他欄の多くは、新年挨拶、紙上名刺交換、暑中見舞、寒中見舞である。
(注2) 紙上名刺交換欄や暑中見舞、寒中見舞等で1団体の枠内に個人名が連名となっている場合、1件とした。
(注3) 1972年4月付、1976年4月付、1977年6月付の『隊友』は欠号のため空白としている。
出典：『自衛』1959年7月付、『隊友』1959年8月付～1980年3月付より筆者作成

表4 1959年7月から1980年3月までの『自衛』『隊友』主要論説欄リスト

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1959年7月	1		木村篤太郎	会長	老兵未だ死せず
1959年7月	1		赤城宗徳	防衛庁長官	洋洋たる前進に希望
1959年8月	1	主張	田中清太郎	滋賀支部長	隊友と戦友
1959年9月	1	主張	黒田栄治	東北発起人	賛助会員に期待する
1959年10月	2	主張	江藤一二	福岡支部長	隊友会結成の意義
1959年11月	2	主張	松永久太郎	第一普連	心のきずな
1959年12月	2	主張	青木高次郎	東京地連	楽観できぬ満期除隊者の転職
1960年1月	1		木村篤太郎	会長	年頭にあたり現職隊員への希望
1960年2月	2	主張	大崎美輝	東京支部長	授け合いの当然性
1960年3月	1	国の守り	木村篤太郎	会長	自衛隊の後盾
1960年3月	2	主張	内山善次郎	東京会員	6か月をすごして
1960年4月	1	国の守り	木村篤太郎	会長	大道を闊歩せよ
1960年5月	1	国の守り	木村篤太郎	会長	現代の選民
1960年6月	1	国の守り	木村篤太郎	会長	人間改造の時期
1960年7月	1				地域篤志会員の活動に期待する
1960年8月	1	国の守り	杉山 茂	副会長	男が美しく思われるとき
1960年8月	2		大庭秀一	札幌支部長	科学的国防論
1960年9月	1		佐藤 毅		精神の作興
1960年10月	1	国の守り	長沢 浩	副会長	一人一人の自覚
1960年10月	2		江崎真澄	防衛庁長官	協力を惜しまない
1960年11月	1	国の守り	中野敏夫		金魚鉢
1960年12月	1	国の守り	杉山 茂	副会長	精神問題
1960年12月	2		中野敏夫	事務局長	隊友会は何をなすのか その性格
1961年1月	2		木村篤太郎	会長	自信と自覚
1961年1月	2		西村直己	防衛庁長官	平和の礎
1961年2月	1	国の守り	佐藤 毅	副会長	最近の国際情勢に思う
1961年3月	1	国の守り	長沢 浩	副会長	無防備中立について
1961年4月	1	私は思う	杉山 茂	副会長	自ら悔いれば人これを悔いる
1961年5月	1	私は思う	内田一臣	海幕人事課長	第三の面
1961年6月	1	私は思う	堀 寛	陸幕課長	共通の広場に手をつなごう
1961年7月	1	私は思う	山田 誠	隊友会参与	チームワークということ
1961年8月	1	私は思う	江藤淳雄	人事2課長	アラモを忘れるな
1961年9月	1	私は思う	吉田英三	隊友会参与	「国防体制の強化」
1961年10月	1	私は思う	千原清治	元陸将補	「リーダーシップということ」
1961年11月	1	私は思う	金原節三	陸幕衛生官	「統後」Die Leute hinter der schlachlinie
1961年12月	1	私は思う	宮崎正直	空幕厚生課長	相互理解と協力を
1962年1月	2		木村篤太郎	会長	決意新たに一致団結
1962年1月	2		藤枝泉介	防衛庁長官	隊友会の発展を期待
1962年1月	2		高木惣吉	軍事評論家・元海軍少将	見かけによらぬ話
1962年3月	1	私は思う	辻 寛一	本会相談役・衆議院議員・元防衛政務次官	世界は広し 母国は一つ
1962年4月	1	私は思う	竹内征平	本会参与・元調達実施本部長	願いは同じ
1962年5月	1	私は思う	白濱仁吉	本会相談役・衆議院議員・前防衛政務次官	私も諸君と共に歩こう
1962年6月	1	私は思う	源田 実	副会長	陛下以外の家来になりたくない
1962年7月	1	私は思う	宮崎壽市	北部方面総監	市町村や職場に防衛の理解を
1962年8月	1	私は思う	上妻正康	陸将補・東京地方連絡部長	桃栗三年柿八年達磨九年俺一生
1962年9月	1	私は思う	志賀健次郎	防衛庁長官	私は志願兵 自衛精神に身を挺す
1962年10月	1	私は思う	木村篤太郎	会長	愛国心を青少年に植え付けたい
1962年11月	1	私は思う	生田宏一	防衛政務次官	優れた心がけの団体として発展させたい
1962年12月	1	私は思う	池田勇人	内閣総理大臣	使命は重く 国民の期待は大きい
1963年1月	2	新春所感	木村篤太郎	会長	防衛意識の高揚に尽瘁
1963年1月	2	新春所感	志賀健次郎	防衛庁長官	隊友会に寄せる期待
1963年1月	2	新春所感	船田 中	本会顧問	守りは堅く
1963年1月	2	新春所感	小幡治和	本会相談役	国民の信頼
1963年1月	2	新春所感	江藤夏雄	本会相談役	政治と国防
1963年1月	2	新春所感	杉山 茂	本会相談役・東京都支部長	支部発展の基盤築く
1963年1月	2	新春所感	長沢 浩	本会相談役	堅実に基礎づくりに進進
1963年2月	1	私は思う	西村直己	衆議院議員・自民党政務調査会副会長	平和日本支える 地味ながら巨大な地盤
1963年2月	1		井手辰義	十六普連・二中	成人式を迎えて
1963年3月	1	私は思う	岸本重一	元陸将	一員になるこそ魅力ではないか
1963年4月	1	私は思う	藤枝泉介	元防衛庁長官・衆議院議員・本会顧問	世論の喚起を望む
1963年4月	1		西谷隆義	東北大学工学部電子工学科	夢に描く自衛 日本の姿
1963年5月	1	私は思う	加藤陽三	防衛庁官房長	青年練成の場としての自衛隊
1963年5月	1		生野茂男	弘報印刷 KK 新入社員	体験入隊所感
1963年6月	1	私は思う	林 敬三	統合幕僚会議議長	徳孤ならず必ず隣あり
1963年6月	1		村田 学	十六普連一陸曹	英霊に感謝の誠を捧げ、遺族に愛の手を
1963年7月	1	私は思う	中村庸一郎	衆議院議員・衆院文教委員・本会千葉県安房地区顧問	国民の骨格の中に 国土を守る潜在力として
1963年7月	1		栗山松一	理事・元陸将	東北における隊友会の現状と将来について
1963年8月	1	私は思う	志賀健次郎	防衛庁長官	国防省設置の気運動く
1963年8月	1		沢井栄次	奈良県支部大和郡山部会長	国旗掲揚を提案する
1963年9月	1	私は思う	賀屋興宣	法務大臣	神様のような気持ちで平和を唱えていない
1963年9月	1		木島秀典	板妻・34 普連・二陸曹	赤い霧の谷間
1963年10月	1	私は思う	千葉三郎	衆議院議員	正しい伝統の継承を期待する
1963年10月	1		杉本 生	陸自滝川部隊・二陸尉	現代っ子に反論
1963年11月	1	私は思う	根本龍太郎	前農林大臣・建設大臣・官房長官	誇りを持って進もう 日本民族は馬鹿ではない
1963年11月	1		木村 光	焼津市赤坂鉄鋼 KK 新入社員	胸にジーンときた規律とファイトと責任感
1963年12月	1	自衛隊創設13周年を迎えて	池田勇人	内閣総理大臣	献身と協力の気風に満ちた隊員たれ
1963年12月	1	自衛隊創設13周年を迎えて	福田篤泰	防衛庁長官	自衛隊記念日に当たり、会員諸氏に望む

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1964年1月	2		木村篤太郎	隊友会会長	大いなる発展と前進を望む
1964年1月	2		福田篤泰	防衛庁長官	健全な歩みで強化と活躍を
1964年2月	1	私は思う	北条敏雄	板妻三十四普連・二曹	祖母の願い
1964年2月	1		名和範二	大村・一六普連	「はい」「いいえ」
1964年3月	1	私は思う	井原岸高	防衛政務次官	忘れられぬ先輩の偉業 国の守りは総力で固めよ
1964年3月	1		新山玉哲	第十二飛行教育団整備補給群	これでいいのか!! 国旗こそ世直しの中心
1964年4月	1	私は思う	高山貞次郎	栃木県連副会長・予備自衛官・一曹	日本だけの不思議
1964年4月	1		松井一郎	陸自隊・練馬・三八八会計隊	希望をもて
1964年5月	1	私は思う	福田篤泰	防衛庁長官	自覚と誇りをもって 青年の活躍を期待する
1964年5月	1		東龍太郎	東京都知事	オリンピックの成功と東京都の繁栄に協力を
1964年6月	1	私は思う	野尻徳雄	東部方面総監	郷土との一体化に 夫々の立場で善処を
1964年6月	1		北村 生	滝川十普連・本管中隊員	君が代の大合唱を
1964年7月	1	私は思う	加藤陽三	防衛事務次官	愛国心と防衛意識
1964年8月	1	私は思う	福田篤泰	防衛庁長官	相寄り・相助けて できる限り協力する
1964年8月	1		佐々木満二	横須賀教育隊教務室	国旗と愛国心
1964年9月	1	私は思う	北 なるみ	福知山部隊職員	理想的人間の形成 スポーツ精神と倫理
1964年10月	1	私は思う	杉田一次	副会長	あらゆる人を常にごまかすことはできない(原子力潜水艦寄港問題)
1964年10月	1		西村利行	熊本地連・事務官	除隊者を花道に!!
1964年11月	1	私は思う	松田 武	副会長	平和と幸福の源は 人間・教養・精神教育
1964年11月	1		山本善信	一宮市消防署消防士・元三五普連隊員	訓練の重要性を悟る
1964年12月	1	私は思う	中山定義	副会長	両立する経済と防衛 =ギリシャに旅して=
1964年12月	1		松井一郎	中央会計隊々員	自衛隊魂の勝利
1965年1月	2	謹賀新年	木村篤太郎	会長	国民思想の啓発に
1965年1月	2	謹賀新年	加藤陽三	前防衛庁事務次官	隊友の一人として生涯をかけて国防に尽くす
1965年1月	2	謹賀新年	小泉純也	防衛庁長官	自衛精神の根幹に
1965年2月	1	私は思う	福地誠夫	本部理事	発展に新たな覚悟 顧みない明治の歴史
1965年2月	1		田崎靖昌	十六普連・二士	抱負を胸に今年も 自衛官・社会人として
1965年2月	1		黒崎菊次郎	十六普連・陸士長	
1965年2月	2		加藤陽三	前防衛事務次官	小さな政治
1965年3月	1	わたくしの発言	池田 孝	係	真の存在価値
1965年3月	2		加藤陽三	前防衛事務次官	小さな政治② 陸曹官舎こそ防衛力の活力源だ
1965年4月	1	私は思う	秋山紋次郎	本部理事	飛び道具は卑怯なり ということなかれ
1965年4月	1		御厨輝夫	日本車両製造 KK 支部長・元地連部長	会員増えの近道 職域部会結成の拡大を
1965年4月	2		加藤陽三	前防衛事務次官	小さな政治③
1965年5月	1	私は思う	伊代 茂	関東甲信総理事	隊友に花を咲かせよう たけなわ春と共に
1965年5月	2		加藤陽三	前防衛事務次官	小さな政治④
1965年6月	1	私は思う	杉田一次	副会長	国家を守る歩哨たれ アーリントン墓地に思う
1965年6月	2		加藤陽三	前防衛事務次官	小さな政治⑤ 公明選挙
1965年7月	1		多田 潔	本部事務局長	隊友会活動・三つの柱 まず財政基盤培養 第一の柱は会員増勢 第二は防衛思想の高揚 第三は遺族援護のこと
1965年7月	1	随想	中野敏夫	本部常務理事	あわれな農夫の顔
1965年7月	2	時評	筒井竹男	相談役	マスコミのかもし出すムードについて
1965年8月	1	賛助会員に呼びかける	多田 潔	隊友会事務局長	認識を願うために
1965年8月	1	随想	中野敏夫	本会常務理事	政治は有言実行だ
1965年8月	2	問題の探究	一水伝	自由政治懇話会常務理事(隊友)	憂うべき危機 日本の実態
1965年8月	2	提言	池野清躬	本会相談役	山川草木悉く隊友
1965年9月	1	賛助会員に呼びかける	多田 潔	隊友会事務局長	魅力と頼り甲斐を
1965年9月	1	随想	福島敏行	日本通運株式会社社長	道義高揚の基調
1965年9月	2	提言	天野良英	陸上幕僚長	隊友と十年後の正夢
1965年10月	1	会員に訴える	多田 潔	隊友会事務局長	期待される隊友像
1965年10月	1	随想	与謝野秀	オリンピック組織委員会事務局長・新イタリア大使	話題とユーモア
1965年10月	2	提言	杉山 茂	東京都総連合会会長・元陸幕長	“気遣い水”の話
1965年11月	1	隊友会の問題点	羽柴正一	元一等陸佐	組織と活動
1965年11月	1	随想	壇 一雄		ソビエトの軍人
1965年11月	2	提言	喜早源三郎	元二等陸佐・現山形市第一貨物中央研修所長	なんとかならないものだろうか
1965年12月	1	会員に呼びかける	多田 潔	本部事務局長	隊友会員の心意気について
1965年12月	1	随想	加藤陽三	前防衛事務次官	若人のスケール
1965年12月	2	提言	西村友晴	海上幕僚長・海将	伝統をきざぐもの
1966年1月	1	新年の課題	多田 潔	本部事務局長	会活動の刷新を図ろう 明るい“民防”基盤の育成
1966年1月	1		木村篤太郎	隊友会会長	堂々若駒の如く使命完遂に邁進
1966年1月	2	年頭所感	松野頼三	防衛庁長官	祖国防衛の根幹
1966年1月	2	提言	浦 茂	航空幕僚長・空将	自衛隊魂
1966年1月	3	新春特別寄稿	細川隆元	政治評論家	共産革命の陰謀 対決する心がまえを昂揚したい
1966年2月	1	会員に訴える	多田 潔	隊友会本部事務局長	会役員は陣頭に立ってほしい
1966年2月	1	随想	大橋英吉	いすゞ自動車(株)社長	ヘソと私
1966年3月	1	特別寄稿	中山定義	元海上幕僚長	戦う台湾の印象記 錦の御旗大陸反攻 精神面の教育に力こぶ
1966年3月	1	会員に訴える	多田 潔	隊友会本部事務局長	隊友会の法的な建前について
1966年3月	1	随想	笹川良一	日本船舶振興会々長・日本郷友連副会長	お笑の話
1966年3月	2	提言	一水伝	隊友・宮崎県自衛隊協力会員・全国自衛隊父兄会 結成委員	社会党が天下をとると自衛隊はどこへ行くか
1966年4月	1	随想	山田久就	元駐ソ大使・同外務事務次官	若き自衛官へ
1966年5月	1	随想	大島謙吉	東京オリンピック日本選手団長・現大阪体育大学 副学長	戸惑いの弁
1966年5月	2		松本重夫	編集主幹	隊友会の組織
1966年6月	1	随想	林家三平	落語家	ありがとう
1966年7月	1	随想	佐治敏三	サントリー株式会社社長	ミュンヘンの街
1966年8月	1	随想	河合 滋	株式会社河合楽器製作所社長、陸士57期	郷土の平和を
1966年8月	2		松本重雄	隊友本社専務取締役・元二陸佐	誤解をとくために 隊友本社の立場をあきらかにする

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1966年9月	1	随想	野津 謙	日本スポーツ少年団本部長、日本蹴球協会会長、アジアサッカー協会副会長、医学博士	サッカー少年院
1966年10月	1	随想	久留島秀三郎	ボーイスカウト日本連盟総長、新生活運動協会会長、銅和鉱業株式会社相談役、日本郷友連盟副会長	マレイシヤ
1966年11月	1	随想	青木半治	日本陸上競技連盟理事長、日本体育協会理事	両手に花
1966年12月	1		木村篤太郎	社団法人隊友会会長	自衛隊を政争の具にするな
1966年12月	1	随想	加藤陽三	防衛弘済会会長、前事務次官	クリスマスのこと
1967年1月	1		木村篤太郎	隊友会会長	今年こそはの決意をこめて
1967年1月	1		増田甲子七	防衛庁長官	全国の隊友に寄せる
1967年2月	1	われらの主張			惠庭事件を注視 団結をもって対決せよ
1967年2月	1	随想	富永一朗	漫画家	羊のごとく平和に
1967年3月	1	われらの主張			自衛隊は合憲である 勇気をもって立ち上がれ
1967年3月	1	随想	杵島 隆	写真家	あゝ同期の桜
1967年3月	2	激動する世界情勢	塚本勝一	陸幕1陸佐	米大統領決意の教書 中ソ関係悪化続く
1967年4月	1	われらの主張			自己の生活を安定 奉仕活動を始めよう
1967年4月	1	随想	松窪耕平	東京銀座、松窪診療室院長・医学博士	男性失格
1967年4月	2	激動する世界情勢	塚本勝一	陸幕1陸佐	英国防費日本の5倍 文革5月が山か
1967年5月	1	われらの主張	多田 潔		惠庭事件の教訓 格調高い歩みを続けよう
1967年5月	1	随想	小長谷亮策	日本蹴球協会常任理事・関東蹴球協会理事長	サッカーさっこん
1967年5月	2	激動する世界情勢	陸幕第二部		核拡散防止条約とベトナム戦争の動き
1967年6月	1	随想	西沢 爽	詩人・陶芸家・日本著作権協合理事・コロムビア専属・大正会会員	テレビ番組
1967年6月	2	激動する世界情勢	文責本部事務局		精神の作興こそ急務 言論界は姿勢を正すべし
1967年7月	1	随想	源田 実	参議院議員 元航空幕僚長	憲法の理想と現実
1967年7月	2	激動する世界情勢			中東戦争の背景
1967年8月	1	われらの主張			隊友と組合活動の関係
1967年8月	1	随想	村松乙彦	日本画家・日展審査委員	こぞってモニターに
1967年8月	2	激動する世界情勢			“文革”の真相を語る 信ずべきは自分の国
1967年9月	1	われらの主張	多田 潔		自衛官の締め出しは憲法違反である
1967年9月	1	随想	有本 優	前田建設工業KK調査役・隊友	歩く凶器
1967年9月	2	激動する世界情勢			日米安保条約の基本的価値と日本の防衛
1967年10月	1	われらの主張	T		隊友と政治
1967年10月	1	随想	江藤夏雄	元防衛政務次官	富士山麓
1967年10月	2	解説			安保条約について (1)
1967年10月	2	激動する世界情勢			日米安保条約の基本的価値と日本の防衛
1967年11月	1	われらの主張	K		世論形成の中核として
1967年11月	1	随想	黛 節子	民族舞踊家	秋の夜なが
1967年11月	2	解説			安保条約について (2) “改訂”ではなくて“再検討”である
1967年11月	2	激動する世界情勢			沖縄返還問題と核基地としての価値
1967年12月	2	解説			安保条約について (3)
1967年12月	2	激動する世界情勢			一九六七年の回顧
1968年1月	1		木村篤太郎	隊友会会長	健全社会の推進役に
1968年1月	1		増田甲子七	国務大臣 防衛庁長官	使命感を生かして
1968年1月	1		牟田弘国	統合幕僚会議議長 空将	年頭の辞
1968年1月	1		辻 寛一	全国組織委員長	自由民主党より隊友会の皆さんへ
1968年1月	2	激動する世界情勢	文責隊友会事務局		一九六八年の展望
1968年1月	3	解説			安保条約について (4)
1968年2月	1	随想	佐藤朽葉	幸福相互銀行勤務・隊友	戦争状態
1968年2月	2	われらの主張			自ら感得せよ 防衛の使命感
1968年2月	2	激動する世界情勢			小笠原返還とベトナム戦
1968年2月	3	解説			安保条約について (5)
1968年3月	1	われらの主張			
1968年3月	1	随想	伊部政一	経済学博士・日大・亜細亜大その他で教鞭をとり、新日本文化人会議理事長	自衛隊員に感謝
1968年3月	2	激動する世界情勢			ベトナム戦争を見て (上)
1968年3月	3	解説			安保条約について (6)
1968年4月	1		源田 実	参議院議員	逆立ち日本の原動力
1968年4月	1	随想	おのつよし	漫画家	サラの越中フンドシ
1968年4月	2	激動する世界情勢	井上 広		ベトナムの戦場を見て
1968年4月	3		多田 潔	隊友	長官しっかりお願いします 謀略の手に乗るな 獅子身中の虫を追い
1968年4月	3	解説			安保条約について (7)
1968年5月	1		橋本信夫	北海道名寄市	隊友会と選挙活動
1968年5月	1	随想	久保田創作	隊友	略語の怪
1968年5月	2	われらの主張			除隊者を軽視するな 物心両面の処遇を望む
1968年5月	2	激動する世界情勢			ベトナム和平を占う座談会
1968年5月	3	解説			安保条約について (8)
1968年6月	1	随想	川島一太	東京隊友	テレビを見ない運動
1968年6月	3	解説			安保条約について (9)
1968年7月	1	随想	長山昌夫	隊友	営業許可
1968年7月	3	解説			安保条約について (10)
1968年8月	1	随想	坂上英知	東京隊友、第一銀行勤務	ニュースの焦点
1968年8月	3				安保条約について (11)
1968年9月	1	随想	佐々木喜之	日本スケート・プール所長	自由への前進
1968年9月	3	解説			安保条約について (12)
1968年10月	1	心の武装せよ	和田盛哉		鳴動する東欧 恐るべきソ連の実態
1968年10月	1	随想	篠田正治	東京隊友・日本宣伝鉛筆社長	不買同盟
1968年11月	1	中央研修会の成果	井上国平	本会理事	体制是正のとき 財政基盤の確立など
1968年11月	1	随想	福地広志	東京隊友・三越本店防護部勤務	二人の性格

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1968年12月	1	随想	木内信胤	財団法人世界経済調査会理事長	イギリスの落ち着き
1969年1月	1		木村篤太郎	隊友会会長	手を携えて頑張ろう
1969年1月	1		有田喜一	防衛庁長官	国民と共にある自衛隊の建設へ
1969年1月	1		牟田弘国	統合幕僚会議議長 空将	隊友の協力に期待
1969年1月	1		小川半次	自由民主党国民運動本部長	国民運動の中核に
1969年1月	2	年頭提言	浦 茂	隊友会副会長 元航空幕僚長	二十一世紀への隊友
1969年1月	3	新年随想	千 宗室	茶道裏千家家元	群衆の中の我
1969年2月	1	隊友提言	杉田一次	隊友会副会長	組織・陣容の充実と思想的武装の必要
1969年2月	1	随想	源田 実	元航空幕僚長・現参議院議員自民党国防部長	勇気と決断
1969年2月	2	時局断想	西村友晴	本会副会長・前海上幕僚長	沖縄問題の議論に欠けるもの
1969年3月	1	隊友提言	浦 茂	隊友会副会長	心の兜と信の対話を 70年へのわれらの姿勢
1969年3月	1	随想	久留島秀三郎	ボーイスカウト日本連盟総長日本郷友連盟副会長	ジャパンを追放せよ
1969年4月	1	隊友提言	和田盛哉	本部長	安全保障の基本問題 情勢の見方、考え方
1969年4月	1	随想	齋藤栄三郎		国防の経済的観察
1969年4月	2		木村篤太郎	社団法人隊友会会長	入学拒否を取り消せ 隊友の総意で都立大学に厳重抗議
1969年4月	3	自衛隊遺族会通信	田中	自衛隊遺族会会長	遺族補償の増額と援護の充実強化を
1969年5月	1	隊友提言	井上団平	本部長	安保説得の一試案
1969年5月	1	随想	源氏鶏太	作家	射撃大会の思い出
1969年5月	2	自衛隊遺族会通信	田中義信	自衛隊遺族会長	(2) この世に花は数あれど人情の花もっとも美し
1969年6月	1	隊友提言	有沼源一郎	本部長	沖縄県民の真の願い
1969年6月	1	随想	宝井馬琴	講談組合会長	礼節と勇氣
1969年6月	4	自衛隊遺族会通信	田中義信	自衛隊遺族会長	(3) 毎年六月十五日を“遺族援護の日”に
1969年7月	1	隊友提言	杉田一次	本会副会長	はげしい沖縄の冷戦
1969年7月	1	随想	名和一男	作家	反骨精神
1969年7月	2	自衛隊遺族会通信	田中義信	自衛隊遺族会長	(4) 遺族の補償対象 第三者協議会で処理を
1969年7月	3	各党の“安保政策”批判	三輪良雄	前防衛事務次官	社会党の巻 矛盾と無理の論旨 ねらいは現体制粉砕
1969年8月	1	隊友提言	西村友晴	本会副会長	防衛議論の変質
1969年8月	1	随想	渡辺鏡藏	自由アジア協会理事長・法博	誰がゲルトから国民を守るか
1969年8月	2	自衛隊遺族会通信	田中義信	自衛隊遺族会長	(5) 明るく、力強く 自衛隊援護のもとに
1969年8月	3		三輪良雄	前防衛事務次官	社会党と安保(二)
1969年9月	1	隊友提言	浦 茂	本会副会長	終戦二十四年 宇宙のルネッサンスを迎えて
1969年9月	1	随想	武者小路実篤	作家	頭を綴ぎにすること
1969年9月	2	自衛隊遺族会通信	田中義信	自衛隊遺族会長	(6) 近づく中央追悼式典 胸打たれる遺族の手紙
1969年10月	1	隊友提言	和田盛哉	本部長	日本の自主防衛 掛け声だけに終わらぬよう
1969年10月	1	随想	佐々木盛雄	政治評論家	政治的配慮の是非
1969年11月	1	隊友提言	杉田一次	本会副会長	ヨーロッパの防衛 米国なくして全うし得られず
1969年11月	1	随想	赤坂小梅	コロンビヤ歌手	大和魂
1969年12月	1	隊友提言	有沼源一郎	本部長	すでに間接侵略は始まっている
1969年12月	1	随想	山本 杉	参議院議員	教育以前のもの
1970年1月	1		武者小路実篤	作家	人間尊重の精神
1970年1月	1		有田喜一	防衛庁長官	国民の理解と協力を
1970年1月	2	隊友提言	浦 茂	本会副会長 元航空幕僚長	七十年代幕あけの隊友へ期待するもの
1970年1月	2		木村篤太郎	隊友会会長	創立満十周年 隊友飛躍のとき
1970年2月	1	隊友提言	西村友晴	本会副会長	自主防衛論の背景
1970年2月	1	随想	渋谷晴雄	詩人	前生の探究
1970年2月	3		杉田一次	本会副会長	隊員の造反に思う
1970年3月	1	隊友提言	堀田耕三	大阪	七十年安保に当たり 日本の将来を憶う
1970年3月	1	随想	古谷多津夫		桜に想う
1970年4月	1	隊友提言	井上団平	本部長	日米共同声明と隊友
1970年4月	1	随想	武者小路実篤	作家	平和な世界
1970年4月	3		塚本政登士		日本防衛“二歳論”
1970年4月	4		鹿内信隆	サンケイ新聞社長	70年とマスコミ
1970年5月	1	隊友提言	和田盛哉		米中ソの関係と日本の立ち場
1970年5月	1	随想	長谷川光太郎	経済評論家	老記者の思い出
1970年6月	1	随想	渡辺鏡藏	法学博士	平和憲法とは何か
1970年6月	2	隊友提言	有沼源一郎	本部長	ヴェトナム戦争の推移に思う
1970年7月	1	隊友提言	鳥貫重節	東北総連副会長	予備自衛官から突き上げられた話
1970年7月	1	随想	源氏鶏太	作家	“文人海軍の会”
1970年7月	4		藤原岩市	東京都防衛協会理事長・隊友会参与	羊頭肉内の平和論を斬る
1970年7月	5		飛永重寿		70年代と政界の動向
1970年8月	1	隊友提言	井上団平	本部長	日米関係の将来を憂う
1970年8月	1	随想	齋藤栄三郎	商学博士、法学博士、文学博士	私の日記
1970年9月	1	隊友提言	原木敏雄	本会理事	万国博のサブ・テーマに思う
1970年9月	1	随想	長谷川光太郎	評論家	昔ばなし
1970年9月	5		池上 巖	隊友会参与	F機関・藤原岩市
1970年10月	1	隊友提言	安崎 操	本会理事	伝統の継承と良い会風
1970年10月	1	随想	秦野 章	前警視總監	指揮官先頭
1970年10月	4		池上 巖	隊友会参与	F機関・藤原岩市(下)
1970年11月	1		中曽根康弘	国務大臣 防衛庁長官	一層の御協力を希う
1970年11月	1		木村篤太郎	会長	会員十万、組織も充実
1970年11月	1		中野敏夫	本会監事	郷土防衛の基幹に 隊友会とともに十年
1970年11月	1	随想	高橋多津	日本防衛母の会々長	叱られる
1970年11月	2	隊友提言	広瀬栄一	東京都総連会長	日本城
1970年12月	1	隊友提言	田中兼五郎	本会理事	自立性と主体性
1970年12月	1	随想	長門 勇	俳優	温故知新
1971年1月	1		木村篤太郎	隊友会会長	日本精神の復興へ
1971年1月	1		中曽根康弘	国務大臣・防衛庁長官	国民的基盤の育成
1971年1月	2	新春隊友提言	塚本政登士	福岡県支部連合会長	隊友会発展の基本
1971年1月	2	随想	市村羽左衛門	歌舞伎俳優	真似る
1971年2月	1	隊友提言	吉江誠一	本会副会長	隊友の在るべき姿

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1971年3月	1	隊友提言	久原一利	本会副会長	三島事件に思う 中正にして健全なる姿勢
1971年4月	1	隊友提言	大室 孟	本会副会長	日本軍国主義化と誰が言う
1971年4月	2		高木惣吉	軍事評論家	F知らず
1971年5月	1	隊友提言	源田 実	本会参与	新しい日本の防衛構想
1971年6月	1	隊友提言	熊本真吾	東北総連事務局長	忘れ去るか東洋の道
1971年7月	1	隊友提言	古館早磨	本会常務理事	総ぐるみで隊友会の強化運動を展開しよう
1971年7月	3	台湾見聞記	久原一利	隊友会副会長・元海将	戒厳令下の安定と繁栄の国
1971年8月	1	隊友提言	原木敏雄	本会常務理事	隊友会に若い力を
1971年9月	1	隊友提言	安崎 操	本会理事	奉仕を合い言葉に精神的魅力化を
1971年10月	1	隊友提言	広瀬栄一	東京都総連会長	われらの姿勢、心がまえ
1971年10月	1		西村直己	防衛庁長官	隊友会に期待する
1971年10月	4		池上 巖		軍国主義呼ばわりに反論する
1971年11月	1	隊友提言	塚本政登士	本会理事	日本防衛と隊友会
1971年11月	3		池上 巖	隊友会参与	軍国主義呼ばわりに反論する(その2)
1971年12月	1	隊友提言	山口 立	本会常務理事	一年生隊友の妄言
1972年1月	2	東西南北	有沼源一郎	本会理事	中共傾斜ムードに一言
1972年2月	1	隊友提言	野尻徳雄	本会常務理事	年初雑感
1972年3月	1	隊友提言	吉江誠一	本会副会長	“内なる国造り”と“豊かな人造り”を
1972年3月	3		緒方 彰	NHK 解説委員長	激動する国際情勢と日本
1972年5月	1	隊友提言	広瀬栄一	東京都総連会長	戦後わが国における戦略体制の変化
1972年6月	1	隊友提言	大室 孟	本会副会長	親ごころ
1972年7月	1	隊友提言	和田盛哉	本会参与	米中、米ソ会談=その底を流れる情勢=
1972年8月	1	隊友提言	福井正勝	北海道総支部連合会会長	隊友会新秩序論 ―その人事と会務の運営と―
1972年9月	1	隊友提言	梶原守光	本会常務理事	隊友会のPR 作戦を展開しよう
1972年10月	1	隊友提言	広瀬栄一	東京都総連会長	日本列島の改造と防衛施策
1972年10月	2		山口 立	理事	中方管区研修会に参加して
1972年11月	1	隊友提言	安崎 操	隊友会参与	「隊友の日」設定について
1972年12月	1	感じたまま	曲 寿郎	陸幕副長	旅の収穫
1972年12月	2		植弘親孝	隊友会常務理事	四次防批判について
1973年2月	2	感じたまま	中村龍平	統幕議長	手をとりあって
1973年3月	2	私はかく考える	山口 立		山口県護国神社祀訴訟問題 矛盾に満ちた訴状
1973年4月	1	満20周年を迎えて	穴戸基男	防衛研修所長	防衛研修所昨年
1973年5月	1		箕輪 登	防衛政務次官 衆議院議員	平時における防衛努力の意義
1973年5月	3		中名生正巳	防衛庁人事二課長	プロ精神と自衛隊 感謝されないことに意義がある
1973年6月	1		平松茂雄	防衛研修所々員	中国の国防建設
1973年6月	3		山口 立	隊友会常務理事	韓国四日間の印象
1973年7月	4		木村篤太郎	一講師 野人	防衛する気概 戦後政治の回顧と日本の進路
1973年8月	1	米国視察から帰って	曲 寿郎	陸幕長	メモリアル・セメトリー
1973年9月	1		石田捨雄	海幕長	訪欧米雑感
1973年10月	1				長沼判決アンケート
1973年10月	2	初秋随感	島田 豊	軍事評論家	
1973年10月	5	焦点	源田 実		長沼判決 民族的感覚を欠く
1973年10月	5	最大の人権を無視してよいか	鳥居信夫	軍事研究家	“戦争”しない自衛隊
1973年10月	5	長沼裁判問答	植弘親孝	隊友会常務理事	憲法と自衛隊
1973年11月	3				長沼判決アンケート
1974年2月	1		木野晴夫	防衛政務次官	愛国心について
1974年3月	3	インタビュー 話題の人			源田実自民党国防部長 自主憲法の制定を
1974年4月	2	親善と理解を深める	白川元春	航空幕僚長	米国訪問記
1974年5月	1	“お隣の国” 拝見	完倉寿郎	ソ連研究家	ソ連の第二シベリア鉄道
1974年5月	1	“お隣の国” 拝見	伊藤圭一	防衛審議官	東南アジア諸国の現状 その一 新しい国家建設の意欲
1974年6月	1		野尻徳雄	隊友会副会長	木村前会長に対する謝辞
1974年6月	3		伊藤圭一	防衛審議官	東南アジア諸国の現状 その二 政治経済に影響与える華僑
1974年7月	3		伊藤圭一	防衛審議官	東南アジア諸国の現状 その三
1974年8月	1		渡辺正雄	自衛隊体育学校三佐	中国のヤングたち
1974年10月	1	私が見た中国軍隊	宮崎繁樹	明治大学教授	軍民一致を強調 “党が銃を握る”の原則のもと
1974年11月	1		内田一臣	隊友会副会長	インド洋の軍事情勢と日本
1974年12月	3		天野良英	隊友会相談役 元統幕議長	戦後の諸紛争に学ぶ=情報活動と戦史研究について=
1975年1月	1	江崎会長新春放談	江崎真澄	隊友会会長	新しい年の幕開け 隊友会中心の健全な社会作りを
1975年1月	2	新春随想	田代一正	防衛庁事務次官	回顧と展望
1975年1月	2		白川元春	統合幕僚会議議長	わたしの渡米報告
1975年3月	1	防衛雑感	栗栖弘臣	統合幕僚会議事務局長・陸将	効率的な防衛力への思考転換を
1975年5月	1		穴倉寿郎	軍事評論家	ベトナム戦争から何を学ぶか
1975年6月	2		渡辺	記者	“覇権”問題について 江崎会長総会で特別講演
1975年6月	3	北方領土問題に思う	藤井一美	キスカ会会長、元十一師団長、隊友会参与	全国民が結集して根気強く返還要求
1975年7月	2		白川元春	統合幕僚会議議長 空将	欧州視察記
1975年7月	3		堀江正夫	隊友会理事	韓国を視察して
1975年7月	4	時の話題	口野昌三	弁護士 元第三師団長 陸将 現隊友会本部理事・防衛施設庁法律顧問・三井物産顧問弁護士	長沼裁判について
1975年8月	1	防衛随一の論客	渡辺	記者	期待される新事務次官 久保卓也氏の横顔 インタビュー
1975年8月	2	隊友がつづる回想と提言	編集部		治道六万人の歓迎の列 皇太子ご夫婦沖繩訪問
1975年8月	3	終戦30周年	山口 立	隊友	新しい出発のために 戦後三十年の反省
1975年9月	2		玉木清司	防衛庁長官	戦友と隊友
1975年10月	2		舞 敏方	隊友会常務理事	第一回防衛トップセミナー報告
1975年10月	4		内田一臣	隊友会副会長	海洋の安全を求めて
1975年10月	4		植弘親孝	隊友会理事	自衛隊の一面面(上) 法制面の問題点
1975年10月	6		伊藤圭一	防衛庁参事官	「防衛を考える会」が終わって
1975年11月	2	向かう横丁	編集部		平和を守るために何が必要か ヨーロッパ戦史に学ぶ
1975年11月	3		野尻徳雄	隊友会副会長	一番近いお隣の国 “韓国” 衆心一途、新国づくり 韓国を訪問して
1975年11月	3		筑土龍男	隊友会参与	韓国とところどころ

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1975年11月	4		久原一利	隊友会相談役	「むつ」母港の速やかなる決定を望む
1975年11月	4		植弘親孝	隊友会理事	自衛隊の側面(下) 法制面の問題点
1975年12月	2、3	角田空幕長欧州視察記	角田義隆	航空幕僚長	考えるヨーロッパ 実戦配備の部隊視察 仏、伊、西独、スイスを訪問
1976年1月	1	新春アンケートから			われら国守る決意あらたに前進 日本の大黒柱!自衛隊
1976年1月	4	安全保障を考える	和田盛哉	元陸将・隊友会参与	民生協力第一主義に対して
1976年2月	4		内田一臣	隊友会副会長	ポスト四次防議論 政治が答えるとき
1976年3月	1		新居克己	防衛評論家	セミナー傍聴記
1976年3月	4		久保卓也	防衛事務次官	訪米雑感
1976年3月	4	横顔拝見	渡辺	記者	竹岡勝美氏(新任の防衛庁人事教育局長)
1976年3月	5	ポスト四次防への提言	植弘親孝	隊友会理事	総合的国防体制の確立
1976年5月	4		中島直臣	隊友会参与	東南アジアの印象
1976年6月	1	ソ連・東欧視察記	完倉寿郎	ソ連研究家	東欧駐留ソ連軍と各国の市民生活
1976年7月	6		和田盛哉	隊友会参与	ソ連の傍若無人の振舞い 日本列島の周辺波高く北京に要人の往来繁し
1976年8月	3	横顔拝見	渡辺	記者	丸山昂防衛事務次官 東京・下町育ち 浪花節の心情もわかるひと
1976年9月	1	長沼控訴審判決	口野昌三	隊友会理事・弁護士・防衛施設庁・防衛共済組合法律顧問	判決は予想どおり 現役に物心両面の声援を
1976年9月	6		山口 立	本部担当理事	英霊にこたえる会 その一員としての隊友会の活動について
1976年10月	1	臨時特集“ミグ25”事件をめぐって…	完倉寿郎	ソ連問題研究家	ミグ25事件とKGB長官
1976年10月	1	臨時特集“ミグ25”事件をめぐって…	新居克己	防衛評論家	ミグ25と欧米の戦闘機群 各国防衛庁の調査結果を注視
1977年1月	1	江崎真澄会長新年あいさつ			国際社会に尊敬される日本に 行動する隊友会へ 予備自衛官らの海外研修も
1977年1月	5	新春随想	鮫島博一	統合幕僚会議議長	忘れられない思い出
1977年1月	5	新春随想	栗栖弘臣	陸上幕僚長	自主性について
1977年1月	5	新春随想	中村梯次	海上幕僚長	積極的な意見具申
1977年1月	5	新春随想	平野 晃	航空幕僚長	良き伝統の担い手
1977年1月	5	隊友随想	高田安董	隊友会常務理事	防衛三本柱の具現を願う
1977年3月	2	防衛トップセミナーから 四氏の講演	奥原敏雄		経済水域は世界で七番目 海洋の活用で経済上有利に
1977年3月	2	防衛トップセミナーから 四氏の講演	曾野 明		ソ連外交はわかりやすい 勢力拡大の武器は社会主義
1977年3月	2	防衛トップセミナーから 四氏の講演	内田一臣		基盤防衛力の内容を再検討せよ 日本の安全おびやかす可能性
1977年3月	2	防衛トップセミナーから 四氏の講演	中嶋嶺雄		米中正常化はまだまだ 米国のアジア政策変わらず
1977年3月	3		丸山 昂	防衛事務次官	ヨーロッパを視察して
1977年3月	6		口野昌三	隊友会理事・弁護士・防衛施設庁、防衛庁共済組合法律顧問	百里基地判決について
1977年4月	1	交遊録忘れ得ぬ人	内田一臣	元海幕長・隊友会副会長	“大和”の乗組員たち
1977年4月	3				朝鮮半島における軍事力の現況
1977年5月	1	交遊録忘れ得ぬ人	加納保之	防衛医科大学校副校長・同大学校病院長	ある患者と医師の願い
1977年5月	2				開発途上国の国づくりに貢献する日本の技術協力
1977年5月	3		H 生		北方領土問題 その歴史を鑑みる
1977年5月	4	制度を聞く			互助年金 会員の福祉厚生施策を推進
1977年5月	5		堀江正夫	隊友会理事	不法なソ連の暴挙 北方四島は日本固有の領土である
1977年7月	2	交遊録忘れ得ぬ人	中村龍平	隊友会副会長	大陸で刑死した友
1977年7月	3		池田久克	防衛庁監査課長	中近東・欧州を旅して
1977年7月	4	訪韓報告	石川 昌	隊友会常務理事	韓国に郷軍人会創立25周年行事に招かれて(その2)
1977年8月	1	交遊録忘れ得ぬ人	今泉正隆	警視庁副総監	草創の頃の人たち
1977年8月	4		口野昌三	弁護士・隊友会理事	津地鎮祭の憲法裁判
1977年8月	5	隊友随想	上田泰弘	隊友会副会長	一、命日 八月十五日終戦記念日に思う
1977年9月	1	交遊録忘れ得ぬ人	越智度男	小規模企業共済事業団理事長	インド在勤のころ 国防会議のころ
1977年9月	4		林 栄一郎	陸幕二部長	北欧・カナダ・アメリカ短見記 栗栖・ロジャース会談 余人を交えず突っ込んだ意見を交換
1977年10月	1	婦国報告	中村龍平	団長	隊友会第一回海外研修団・ヨーロッパで見たこと、感じたこと
1977年10月	4		宮沢作太郎	前ビルマ防衛駐在官 一等陸佐	防衛駐在官から見たビルマ
1977年10月	5	隊友論壇	石隈辰彦	隊友・元海将	防衛白書を読んで
1977年11月	1		中村龍平	団長	隊友会第一回海外研修団婦国報告(第2回) 国防に心血そそぐ欧州の小国
1977年11月	5	隊友論壇	松金久知	元陸将 前東北方面総監	防衛白書を読んで
1978年1月	1	江崎真澄会長新年あいさつ			決意新たに前進 秋に海外研修 来月防衛セミナー開講
1978年1月	4	新春随想	金丸 信	防衛庁長官	国民と共に進む
1978年1月	4	新春随想	栗栖弘臣	統幕議長	野性味
1978年1月	4	新春随想	大賀良平	海上幕僚長	新春随想
1978年1月	4	新春随想	高品武彦	陸上幕僚長	新年のご挨拶
1978年1月	4	新春随想	平野 晃	航空幕僚長	年頭所感
1978年2月	1	交遊録忘れ得ぬ人	上田泰弘	隊友会副会長	恩師。級友。生徒。
1978年2月	5				江崎会長所感 <新春アンケートを読んで>
1978年3月	1	第4回防衛トップセミナー開く	林 健太郎	前東大総長	すぐれている日本「世界の中の日本の文化」
1978年3月	1	第4回防衛トップセミナー開く	桃井 真	防衛研究所第五研究室長	80年代に崩れる米・ソバランス「米・ソの核戦略とアジアの戦略情勢」
1978年3月	1	第4回防衛トップセミナー開く	生田豊朗	日本エネルギー経済研究所長	立ち遅れのエネルギー政策「来るべき危機と日本経済の安全保障」
1978年3月	1	第4回防衛トップセミナー開く	矢野 暢	京都大学助教授	世界で位置づけの哲学を「今後のアジア情勢と日本の防衛」
1978年4月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		スーパー・スマート・ウェポン—F15—基かSAM—千基か?—
1978年4月	6	解説	編集部		あらためて山口裁判の全体について紹介
1978年4月	7	隊友随想	斎藤春義	隊友会理事	朝鮮半島に破局が来るか

発行年月	面	タイトル	署名	肩書	見出し
1978年5月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		<宇宙の眼は知っていた>大韓航空機事件の紙面に出ない教訓
1978年5月	4		原寿満夫	元陸将・陸幕第五部長	新中国を訪ねて(一)
1978年6月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		HITEXマジック30 ー自衛隊に耳の痛い話
1978年6月	4		小笠英敏	元空将・航空幹部学校長	新中国を訪ねて(二) 東北の旅
1978年7月	1		川島一太	城東地区連合会長	東京で働いている仲間たちの生活と意見 共通の苦勞もった社会人 都総連・城東地区連合会の人たち
1978年7月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		<考えたくないことを考える>ー銷夏ショッピング・シナリオー
1978年7月	3		高田安董	常務理事	若年停年の不遇是正 早期実現を訴える
1978年7月	4		原寿満夫	元陸将・陸幕第五部長	新中国を訪ねて(三) 西安から広州へ
1978年8月	1	栗栖氏辞任問題	野尻徳雄	隊友会副会長	率直に意見交換 丸山事務次官と会谈 野尻、内田、中村、白川各 福会長
1978年8月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		<白夜の国にて>ー閑話休題ー
1978年8月	4		味岡義一	隊友会常務理事	中国・欧州に旅して
1978年9月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		<ソ連筋情報?>ーホンモノかガセネタかー
1978年10月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		TOPGUN プログラムに学ぶ 論争から戦力は生まれない
1978年10月	4		国島清矩	隊友・前自衛艦隊司令官	防衛白書を読んで
1978年10月	6	報告	山口立	隊友会理事	六ヶ年にわたる山口裁判結審 判決は来年3月22日
1978年11月	4		高橋彌次郎	大阪防衛協会囑託	守りが本命ならもって防禦を徹底せよ
1978年11月	4		高田安董	常務理事	第二回海外研修報告(その一) 感動したホーク実射見学 印象深い 米軍司令官挨拶
1978年12月	3	現代鹿鳴館説話	シグナル		ハードウェア(形)とソフトウェア(心) ーF15とP3Cを殺すな ー
1978年12月	4		久原一利	水交会理事長	忘れられた台湾 日中友好平和条約成立
1979年1月	1		江崎真澄	隊友会会長	江崎真澄会長新年あいさつ 新しい発想と勇気ある行動を
1979年1月	3		高品武彦	統合幕僚会議議長	新年のご挨拶
1979年1月	3		内田一臣	隊友会副会長	現代の奇襲 米・中国交樹立と今後
1979年2月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		スウェーデン詣でのスウェーデン知らず ー新研究所に望むことー
1979年2月	4		中村龍平	隊友会副会長	国後 拒批に対するソ連軍の増強
1979年2月	4		増岡鼎	一佐	無名戦士の墓に想う 日ソ両国民の違い 英霊を大切にすること
1979年3月	4		清水鶴造	中国理事	時代に対応する活動を
1979年3月	4	台湾国軍	畷本正克	広島県連会長	輔導委員会を訪ねて 一輔導組織と事業活動一
1979年3月	5		田中盛隆	参与	魅力ある隊友会に 創設当時の回顧 隊友の心つなぐ「隊友紙」
1979年3月	6		堀江正夫	参議院議員	東南アジア訪問記
1979年3月	7		栗栖弘臣	前統幕議長	当面の防衛問題 防衛講演会の講演要旨
1979年4月	4		高田安董	隊友会常務理事	隊友会の性格について
1979年4月	5		篠田寿彦	山口県連顧問	四方と六法
1979年4月	6		山口立	隊友会理事	山口裁判の判決及び控訴について
1979年5月	4		桑原安正	立川市会議員 隊友会立川支部長	同志の地方自治参画を祝して…
1979年5月	5		石川昌	木更津市長	われ、かく戦えり 市民のための政治を
1979年6月	4	隊友会の現況	高田	本部常務理事	総会で報告
1979年7月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		ミンスク騒ぎ始末記<米国人記者のコメント>日本の防衛力東京の ステーキと同じ?
1979年7月	4		原寿満夫	常務理事	自衛隊創設25周年におもう
1979年7月	5		村田良明	一等陸佐	欧州で感じたこと 手厳しい対日感
1979年8月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		真夏の夜の悪夢 新版エクソドス
1979年9月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		「日中人文社会科学交流協会」の発会に寄せて ー総論友好から各論 友好へー
1979年9月	3	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	米太平洋軍の沖繩演習の背景くもう一つの見方>
1979年9月	4		清水鶴造	理事 中国地方担当	日本海近海の軍事情勢 第一潜水隊群司令に聞く 語る人 長田博 海将補
1979年9月	5		高田	理事	予備勢力による防衛力増強
1979年9月	6		猪木正道	前防衛大学校長・現平和安全保障研究所理事長	日本の安全と防衛 大分県連発足20周年記念講演
1979年9月	6		田中象二	隊友会理事	戦争体験は風化したのだろうか
1979年10月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		モートン・ハルベリン大いに語る 日本防衛予算はすでにGNPの 一・五%
1979年10月	2		近藤清	研修団長	ヨーロッパ見たこと 感じたこと
1979年10月	5		高田安董	常務理事	防衛予算抑制の因果を憂う
1979年10月	5		澤山正明	隊友会理事	素人の憲法論議
1979年10月	6		原寿満夫	隊友会常務理事	北方四島にソ連軍増強 わが国の対応について
1979年10月	6		村山房夫	一等空佐	大韓民国の現状ーその一端についてー
1979年11月	4	時の動き	中村龍平		今こそ防衛開眼を 政治もマスコミも不毛の混迷
1979年11月	4		久保田徳夫	隊友会事務局長	「国防を考える」若手経済人の熱気にあふれて
1979年12月	2	第六回防衛トップセ ミナー聴講記	山本七平	講師 山本書店主	日本及び日本人
1979年12月	2		内田一臣	隊友会副会長	前回以上の切迫感 ーパネルディスカッションー
1979年12月	3		瀬島龍三	講師 伊藤忠商事会長	1980年代の日本の安全保障
1979年12月	3		高品武彦	講師 前統幕議長	最近の軍事情勢と日本の防衛
1979年12月	7		福富繁	日本市民防衛協会事務局長	欧州諸国の市民防衛を見る わが国土防衛に欠落しているもの
1980年1月	3		染谷誠	防衛政務次官	変化に備える柔軟性
1980年1月	3		竹田五郎	統合幕僚会議議長 空将	年頭の辞
1980年1月	3		永野茂門	陸上幕僚長 陸将	日米共同の強化充実
1980年1月	3		大賀良平	海上幕僚長 海将	装備近代化と教育
1980年1月	3		山田良市	航空幕僚長 空将	防衛力の充実整備
1980年1月	3	時の動き	中村龍平	隊友会副会長	一九八〇年代の幕あけ
1980年1月	6	政治への要望	内田一臣	隊友会副会長	一九九〇年を見通して
1980年2月	1		野尻徳雄	隊友会副会長	遺憾なスパイ事件 自衛隊の今後の対策に協力
1980年2月	1	現代鹿鳴館説話	シグナル		史書にない史実 求められる正しい歴史を書く勇断 ー歴史は過去の 延長=
1980年2月	6	時の動き	白川元春	隊友会副会長	ソ連軍のアフガン侵入 世界の平和に日本が果たす役割を考える時
1980年3月	4	時の動き	内田一臣	隊友会副会長	

(注1) タイトル、署名、肩書未記載の場合は空欄
(注2) 肩書は記事中のものを原文のまま掲載した。全て掲載当時のものである。
出典:『自衛』1959年7月付、『隊友』1959年8月付～1980年3月付より筆者作成